

3 新景観政策10周年記念事業

－京都から考える これからの歴史・文化・創造都市－

1 特別鼎談

平成29年9月10日（日）14:00～17:00

立命館大学 朱雀キャンパス 大講義室（ホール）

参加者：約300名

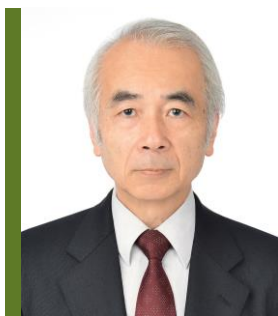
基調講演



鷺田 清一

京都市立芸術大学学長

基調報告



門内 輝行

大阪芸術大学教授，京都大学名誉教授

鼎談

鷺田 清一

京都市立芸術大学学長

×

門内 輝行

大阪芸術大学教授，
京都大学名誉教授

×

門川 大作

京都市長

基調講演

鷺田清一

都市計画や環境、景観の専門ではない私がお話させていただくのは僭越ですが、市民としてはプロであるのでそういった視点からお話をさせていただきます。

京都はもちろん、奈良、金沢等、ひどい戦災を受けなかったまちは幸運です。京都のまちは、一つの箇所に住んだ時、多様な歴史が積み重なっていること、折り重なっていること、或いは、今日まで色々な出来事があり、色々な葛藤があり、それらに折り合いをつけてくることで現在の姿になっているということが感じられ、とても恵まれています。

「まちづくり」は大きな二つのジレンマを抱えています。一つは「計画性と自然発生性」です。「変えていく、つくっていく」というプランニングと、正反対の「自然と自ずからそうなる」ことを待つことが、対立したまままちづくりに内包されています。その典型は、大阪と東京です。東京は日本で唯一、駅前に看板がない都市ですが、それは丸の内側に限った話で、八重洲側は複数の看板が見られます。大阪では中之島一帯にはほとんど看板が見られませんが、地下鉄に降りると階段の蹴上にまでぎっしりと記号で溢れていたり、道頓堀には蟹が動いたり、龍がせり出したり、人形が太鼓を叩いたり、看板として平面に収まらず立体的に道に張り出しており、そのアナーキーさが魅力となっています。これらを別の場所で実践するのであれば、なんということはありません。ゾーニングをすると、背反

する二つも成り立ちますが、一つのところで「計画性」と「自然発生性」の折り合いをつけるのは本当に難しいことです。

整然とした町並みをつくるという行為は、ある意味、破壊を伴う行為です。パリは世界でも美しいとされる都市ですが、これらは破壊によりもたらされたものです（19世紀、オスマンによるパリの大改造）。また、美観という理念を以って、ある行為を市民に強制するという側面があります（アンドレ・マルローの時代に、建物の煤を落とさせ、本来の石材の色を取り戻させた）。

京都のまちも、始めは条里制の下、整然と作られた経緯があります。現在、良いと認識される町並みの原点には、規制などの働きがあったことはいまでもありません。しかし、人々は、そういった規制の中でも、個々にもっと心地よいように、もっと宣伝になるように、もっと見栄えするようになど、勝手な行動に出、結果、猥雑な町並みが自然と成っているのです。これらのバランスは非常に難しいものです。これについては、景観というよりも、都市行政そのものがそういった性質を持っているのだと思われます。

二つ目は、「ユニバーサルなもの」とローカルなもの」の共存です。経営学者の大竹文雄氏が面白いことを言っていました。「まちの人が求めるものは、そこにはないもの。他所の人が求めるものはそこにあるもの。」だと。私もずっと木造の家に住んできたので、「町家再生」というと「あんな隙間風だらけで、冬は寒いのは…」と感じてしまい、東京の高層マンションの最上階に憧れ

る気持ちもありました。京都市民がよく憧れるのは、神戸です。神戸は天候が良く、海が見えるといった京都にないものがたくさんあります。ところが、よその人が京都に求めるものは、古いものが多く、木造の瓦による調和の取れた風景であり、実際は京都に来ると、雑然とした印象を受けがっかりするのです。

京都の人間が「便利さ」、「快適さ」といったユニバーサルな、どこの都市でも必要とされるものを欲しがり、巨大な商業施設が建てられ、コンビニやITのショップが至るところに見られるようになりました。しかし、それはまちのローカルティ、そこにしかないものが失われていくプロセスでもあります。便利さ、普遍さ、ユニバーサルティをある程度満たしながら、そこにしかないものをいかに受け継いでいくかということは、原理的に対立する事項であり、非常に難しいことです。

「計画性と自然発生性」、「ユニバーサルなもの」とローカルなもの」、これらは非常に難しいジレンマですが、これを考えることを引き受けなかった場合、都市はとんでもないこととなります。景観というものを考える時、難しいジレンマを引き受け、我々が心地よい景観・住み心地を獲得するにはどのように考えるべきかをお話した



いと思います。

私は景観の本質について、景観とは見るものではないと考えています。景観は建築物の高さや色が揃っているかという視覚の対象として語られることがほとんどですが、あるまちを訪れたとき、家並みの前に立ち、見て、「町並みが良い」と感じる人はいないのではないのでしょうか。景観とは、まちの中を歩きまわらる中で感じられるものであり、或いは、気配や雰囲気、趣きとして感じられるものなのです。

これは絵描きが風景画を描くプロセスと非常に似ています。絵描きは、現場でスケッチし、家に帰ってから仕上げます。そして多くの画家は、写真ではなく自身のスケッチを下に絵を描くのです。これは、スケッチしている際に自身がその風景に包まれた体験や、身体感覚、躍動したり沈み込んだりした心感覚を、キャンバスに定着させる行為なのです。

私は、景観を考える際には、「景観」ではなく「景色」という言葉を用いた方が良いと考えています。この際、景色の「色」は「colour」ではなく、日本語における「いろ」です。この「色」については、「色が匂う」といった表現などがあります。辞書には「趣き」や「様子」「気配」「佇まい」「兆し」「匂い」といった意味が掲載されています。まさに、目には見えない奥行きあるものです。そういった意味での風景としての「色」を持つことが景観を考える上でも非常に重要です。

そういった視点を踏まえると、二項対立、ジレンマのように見えるものが、折り重なって都市の奥行き感をつくっているという発想ができるようになります。視覚的に美

しいのは整然としたものかもしれませんが、景色として美しいのは、対立する何かか幾重にも折り重なっている状態なのではないでしょうか。京町家の坪庭のように、自然から隔離された家の中に、もう一つの自然が入れ子になっている。また、その状況が気配としては感じられるが、視覚的には覗えないという奥行きが重要なのです。あるいは、町を歩いているとき、格子の向こうから機織の音が聞こえる、三味線を練習する音が聞こえる、子どもたちの声が聞こえるなど、見えていないものから聞こえてくる音が奥行きを与えるのではないのでしょうか。

そして最後に、景色として考えること以上に重要な事項は、美観やそれに基づく規制といったことよりも、コミュニティのあり方の問題なのではないかということです。つまり、「まちの色」につつまれたとき、それを良いと感じるかどうかは、人々にその空間が敬意を持って使われてきたかによるのです。「敬意を持って」という表現が重過ぎれば、「大事に」と言い換えてもいいでしょう。我々がお寺や道場に足を踏み入れた時、普通の住宅と変わらず畳が敷かれているその空間を「すごく大事に使われている」と感じる経験があるはずです。掃除や修繕等の行為から、敬意を感じたとき、ふと「良い空間」であると感じるのではないのでしょうか。これをまちに言い換えると水撒きや単に掃除がされているという事実だけではなく、住民が自分たちの場所を湊く大切に思っている気配を感じたとき、「ここは良いところだ。住んでみたい」と思うのではないのでしょうか。

ここで思い出すのは、京都の番組小学校

です。私は下京区の小学校に通っており、子どもの頃は何とも思っていなかったのですが、長じて、なんて良い学校に行けていたのかと思います。

それは、教職員が特別に良かったわけではなく、空間が特別良かったといえます。当時の小学校は、児童の自宅より質が高く、地域で一番立派な建物でした。大阪においても、立派なものが作られました。これは、当時の大人が子どもを大事に思っていたということでしょう。

現代では、「どうせ子どもが使うのだから、すぐ壊してしまう。それなら安いものを。」という考え方になってしまいます。当時はそう考えず、子どもが一日のうち最も長く過ごすところだから立派にしようという大人の思いがありました。地域のセンターとしての機能があったことや、他の学区との競争、つまりは見栄張りという側面も理由としてありましたが、「子どもに立派なものを」という考え方があったのは否定できません。

子どもの頃を振り返ると、当時の大人たちの思いを感じ入ることができ、それが長じて大人になった市民のプライドにつながっています。そういった経験があって、初めてまちへの愛着が生れるのではないのでしょうか。

振り返ると、その空間が使う人により、どれだけ大事にされているか、敬意を持って使われているかが、景観の持つ気配や雰囲気、佇まいの良さを支えているのではないのでしょうか。

最後に、ジレンマの折り合いの付け方、ジレンマをジレンマとせず、奥行きに変えていく方法についてお話しをします。

町並みとは個人や家族の集まりですので、皆の好みが一致するという事は滅多に起こりません。ですので、どこかで理念に基づく呼びかけが必要となってきます。その理念が上手く行っているまちについて、若い頃のヨーロッパでの経験を基に御紹介させていただきます。

景観、景色を見て、良いまちだと感じるまちには共通して、一つのスタイルがあります。それは観賞の対象としてではなく、人々の生活に見られるスタイルです。会話のスタイルやものづくりのスタイル、商売のやり方、行政の手法、それらを同一の価値が貫いています。

具体的な例として、ドイツのゾーリンゲンなど中小のタウンでは、「イグザクトネス＝正確さ」が生活の中で最重要視されています。教育も、ものづくりも、政治家の評価、法律についても凄く「精密」です。子どもの寝る時間までルールを決めるなど、合法則的であることを大事にしています。その気配がまちに立つと感じられるのです。

その逆がフランスで、精密さ、厳格さなどはあまり要求されません。むしろ、「シック、エレガント」であることを重要視しており、服装やおしゃべりに限らず、ものづくり等においてもデザイン、趣味の良さが最優先され、「シック、エレガント」を貫いているという印象です。

また、一方、カラフルな町並みのイタリアでは道の反対側を歩く人に声をかけることがエチケットとされるなど、自動車も食べ物もすごく「情熱的」です。何事も「センシユアス（官能的）」なスタイルを全面に出しています。

そういった理念、価値観がはっきりと感じ

られるまちは素敵だと感じられます。「精密さ」というのは大事であり、ユニバーサルな価値です。「エレガント、優美である」ということも、不要であるという人がいないユニバーサルな価値です。また「官能性」というのも人を心地よくする誰もが否定できない価値です。これらは、皆、普遍的で、どれもあれば越したことはない概念なのです。しかし、そのうちどれを機軸にするか、どれを優先するかといった価値の遠近法が、それぞれローカルな場所では明らかに異なっています。まちの魅力はそこにしかないものであるが、それが体現している価値は普遍的なものである。そして、どの価値を機軸として大事にするかはローカルな場所により異なるということです。

これらを踏まえ我々の課題は、京都というまちが、このまちを訪れた人がユニバーサルな満足を得られ、なおかつここにしかない価値を感じられるようにすることです。そして、それがどんな価値なのかを考えることが、景観というものを考えるにおいて、最終的な問題になるのではないのでしょうか。

かつて、京都市の基本構想において、京都の自慢していい価値を挙げたことを記憶していますが、そういったことを皆で議論し、選んでいくことが、たいせつではないのでしょうか。

基調報告

門内輝行

鷺田先生から非常に奥深いお話をいただきましたが、私からも景観の概念について少し説明をさせていただきます。Townscape＝都市景観という英語ができたのは1950年代、第2次世界大戦後です。Townscapeを提唱したゴードン・カレンは「半ダース建物が集まると建築を凌ぐ芸術が芽生える」と言いました。一つでは景観にならないが、集まると景観になるのです。scapeという言葉の語源は「形」という意味と「束ねる」という意味があります。～scapeは本来、建築など何かを「集める」ことであり、これは「関係としての景観」につながるものです。

一方、先ほどのお話にあったとおりドイツ人は緻密であり、ドイツ系地理学では景観を「関係」だけでなく「全体」のシステムとして考えています。景観学は人相学から始まっており、都市景観とは都市の人相のようなものです。景観とは、感覚的に知覚され、表象される事物の集合で形成された全体であるとされています。誰が集めるか、どう集めるのかにより、人によって景観とは異なるものとなります。景観とは、我々自身がまちの中から何かをピックアップし、対象化していくなかで創り上げていくものであり、主体と対象物との関わりあいの中で定義されています。

【京都市の景観政策の歩みを説明】

国において景観法が制定されたのが2004年で、実は私が東京から京都に戻った年であり、この年から京都の景観政策に関与させていただいています。

京都の景観政策は、国よりも少しずつ先を歩んできたと言えます。1200年を超える歴史の中で色々な時代の層が重なり合っており、上手い重なりが出てくると素晴らしい景観になるのですが、衝突も生じやすく、それに対し様々な手が打たれてきました。

鷺田先生も関与され、1999年に策定された京都市基本構想の中に、「大量生産・大量消費・大量廃棄型の都市文明のあり方に対して、私たちは環境との調和を目指す持続可能な社会を作っていく必要があります、これは次世代に対する大きな責任である」という記載があります。当時の危機感として、特に産業や観光の伸び悩み、工場や大学の市外流出、文化の創造力と発信力の低下、都心の空洞化、景観の消失等、多様な課題が指摘されていました。

これは、私の解釈で言うと、「工業社会」から「知識社会」への転換だと考えています。私たちは、科学技術の発達に支えられたものづくり中心の20世紀の工業社会において、生活の質を高めてきた代わりに、人類の未来にとって深刻な問題を引き起しました。工業社会が行き詰まったため、21世紀という時代では、失われた自然環境

や文化環境の回復を図るところから始め、豊かな生命と暮らしを育むことを目指して、自然との共生や人間相互の絆を大切に、持続可能な社会の構築が求められています。この新しい社会は「知識社会」と呼ばれ、非常に大きな転換期を向えています。

この転換に対し、ものづくりやデザインの仕方を全般的に変えるべきではないかという考え方の下、日本学術会議（人工物設計・生産研究連絡委員会 設計工学専門委員会）から2003年に「21世紀における人工物設計・生産のためのデザインビジョン提言」がなされています。ここでは、もの（要素）のデザインだけでなく、もっと広い「関係」をデザインしなければいけないこと、単につくるだけでなく、つくったものを手入れし育てていかなければいけないこと、そして、一人でなくユーザーや専門家などの多主体の対話によりつくっていかねばならないことを提言しています。

私もこの提言の策定にかかわったのですが、議論の中で、農学部の先生が「農作物には水と肥料をやるのですが、建築には何をやるのですか？」と尋ねられました。これは、手入れという行為が非常に大事になるという原理の転換を示しており、これを最もよく表しているのが景観づくりであるといえます。自分がどんなに良いものをつくっても、周りに真っ赤な色を塗られたらまちの景観は壊れてしまう。周りの人と一緒につくらなければならず、多主体でなけ

れば実現できないのです。また一方で、景観は一度につくることはできず、過去の世代がつくってきたものを次世代につないでいくという駅伝のような行為であり、育てていくしかない面もあります。

こういった観点から、21世紀的なものづくりの最も典型的な例が景観デザインではないかと考えられます。

私は、日本の伝統的なまちなみ200箇所の現地調査をし、研究をまとめていますが、その結論の一つである「街並みの美の秘密」は、限られた数の要素の組合せから無限の景観のバリエーションを生成していくということです。ちょうど言語と同じで、アルファベット26文字程度は共有し、その組合せで豊かな表現をしています。もしアルファベットが100あると覚えるのが大変で組合せまで頭がまわりません。そういう意味では現代都市は、様々な要素が氾濫しており、「組合せの美」がつくれていないのです。

共有された要素が適当に変形・結合され、互いに類似しながら、それぞれが個性を感じられるような魅力的な景観が形成されています。自分一人で完結するのではなく、隣の家との関係を考えて、周りの家に応じてチューニングするが、全く同じではなく、自分なりの個性を出していく。そういう意味では、鷺田先生の言うジレンマを同時に成り立たせているのが、共同体の景観であり、街並みの美の秘密なのです。その組合せ方をどうするのが、まちの個性につながります。

2002年には日本建築学会から、「京都の都市景観の再生に関する提言」が出されています。この提言の中で、京都の景観問題として、自然景観の破壊、京町家などの喪失と高層マンションの建設等による人工景観の破壊、産業の衰退や小学校の統廃合をはじめとするコミュニティの絆の解体など社会的背景の構造的な変化などが挙げられています。さらに注意すべき点は、デベロッパーだけが景観を破壊するのではなく、国家の税制や法律までもが歴史的景観を壊すということです。例えば先斗町にいくと、建築基準法では建替えの際、4m以上の道幅を確保する必要があり、前面道路がのこぎり状になってしまい、路地の風情が消えてしまうといった状況が生じます。都心においては防火地域や準防火地域に指定されると木造の露出ができなくなり、新しく建てようとする伝統的な木造は建てられません。緩和する手立てはありますが、まちなみの魅力を継続させていくには、法制度との戦いが必要です。景観破壊というのは気がつきにくいのですが、気がついたときには世界が変わっているのです。京都の1935年の写真と現在の写真を見比べると、一つ一つの変化では気がつかないのですが、大きく変わっていることがわかります。ユニバーサル化とローカルの衝突はアジアの諸都市で見られますが、特に京都では顕著に見られます。

2003年から京都市は「国家戦略としての京都創生」として、あらゆる手段で京都を



四条烏丸から比叡山を見る
 (上：1935年，下：現在)
 (出典：「京町家の再生」写真：井上成哉)

創生すると宣言します。しかし、なかなか京都だけでは出来ないこともあり、そこは国の宝として、国家戦略として国に力を貸してもらえようをお願いしていくというものです。

2004年に「景観法」が制定されますが、景観法の制定の背景には、全国的に景観条例が出来ていったことがあります。2002年時点で486の条例が施行されています。景観法では、国は大まかな理念を示していますが、何が良好な景観であるかについては各自治体（景観行政団体）で決めることとなっています。これは地方分権に対応するフレームワーク法といえます。また、景観法は、すべて「できる」規定で書かれています。つまり、何もしなくても罰則はなく、頑張ったところだけに支援が

くるという仕組みとなっています。

また、2005年には「文化財保護法」が改正され、「文化的景観」の制度が創設されています。京都の場合は、現在、岡崎が重要文化的景観に選定されています。

このような動きを受けて、2006年に「時を超え光り輝く京都の景観づくり審議会」の答申が出され、京都市の「新景観政策」が実施されることとなります。

【新景観政策の概要等を説明】

新景観政策により、京都全体の経済が落ち込むのではないかという批判がありましたが、住宅地の平均価格、商業地の最高価格、新設の住宅着工数などは、大阪市・神戸市と比べて特異な傾向は見られません。一方で、市民意識は、「京都の個性的な景観が守られている」と感じる割合が増加しています。観光客数については3年連続で5500万人を維持しており、特に最近では東京オリンピック・パラリンピックの影響もありホテル等の宿泊施設の建設数が急増しています。また、オフィスについては空室率が低下しており、不足が見られます。

京都市の財政状況は、社会福祉の関連経費が増えています。市税の収入は伸び悩んでいます。人口については、平成52年までに約20万人減少し、総人口130万人を割り込むという予測もあります。今後の人口減少期において、昼間人口や交流人口をどのように考えるかは、都市政策上の大きな課題です。



新景観政策10年記念事業の全体テーマは、京都「を」考えるだけでなく、京都「から」考える「これからの歴史・文化・創造都市」であり、「都市の活力を生み出す景観」、「コミュニティと景観まちづくり」、「景観を紡ぎ出すデザイン」、「景観・文化の継承と創造」の4つのテーマをベースに議論を深めたいと思います。

これからは地域固有の資源を活かしながら、多様な特色ある景観をつくっていかねばならないと考えられますが、そのイニシアチブは、そこに住む市民が担うべきです。鷲田先生の言うジレンマを解くためにも、トップダウンとボトムアップを上手く組合せていかなければなりません。また、これまでは視覚的なデザインを規制することを中心に政策が進められてきましたが、これからは良い景観をいかに創っていくのかを考えていく、「規制法」から「創造法」への転換が必要です。

鼎 談

鷺田清一 × 門内輝行 × 門川大作

門川：1995年に策定した京都市基本構想の第1章は「市民の生き方」です。景観も、市民がどう生き、どういうまちづくりをしていくかにかかっているということを感じました。この10年については改めて京都市の市民力・文化力・歴史力を実感していますが、それをしっかり評価し、課題を明確にして100年後だけでなく、1000年後も展望した景観をつくっていかねばならなりません。見る景観だけでなく、活力ある市民が文化的で生き活きた生活をしていく様を実現する必要があります。

門内：景観をまちづくりの中で議論すると、景色や気配といったところまで話が及ばず、規制の基準等について終始してしまいます。かつては集落やまちがあつて、それぞれにコミュニティがあり、それが美しい景観という秩序となって現れていました。現代社会では、各々の敷地の中で決められた規制さえ守っていれば自由にできます。景観を敷地に落としこむ「敷地主義」に陥っているといえます。景観をつくるには敷地間の関係をつくる必要があります。気に入らない人と合わせるといふのも困難なので、景観づくりを通してコミュニティを作っていくような逆転の発想が必要です。

鷺田：敷地主義と景観が最もリンクするのは屋根の付け方でしょう。京都の住宅は長屋でなく戸建てが一般的で、屋根は隣接す

る敷地にまで入って付けられています。しかし、近年の住宅は厳密に敷地内に収まっていて、少しでも隣に入ろうものなら、侵害したとなります。屋根どうしが重なっていると雨水が入ってこず、非常に実用的であり、思いやりが感じられるのですが。

門川：私も京町家で育ちましたが、父が「隣との境界を拳骨一つ分も無くし、連続することで、タバコも捨てられず、安心安全につながる」と言っていました。

鷺田：私はプライベートな空間、パブリックな空間の間でもはみ出ているのが好きです。セットバックにより高層の建築物を建てる制度がありますが、横浜の元町やスイスのベルンなどでは1階だけがセットバックし、パブリックな空間となっている。1階がお店になっているとまちとしての風情が感じられます。

門内：アメリカのポートランドでは、個々の建物を閉じたハコにはせず、道との関係をつくることを考えています。隣も同様に考えることでにぎわいが生れ、千客万来のストリートができるわけです。これは1軒だけでやっても効果がなく、連続させることでまちが変わるのです。

門川：この10年で新景観政策が浸透し、他府県からの事業者も設計の際、規制に合わせないといけないことを理解いただいている反面、基準に合わせさえすれば良いと理解されている嫌いがあります。景観を創

造していく、パートナーシップでつくりあげる、地域に応じた景観をつくる、都市の魅力、活力を創造する、そういった観点が欠如し、見た目の議論が中心になっているので、御指摘いただいた感じる景観を実現したいと思います。

例えば島津製作所では、地区計画を活用いただき、中心部のみ建物の高さを31mにする代わりに、防災機能や周辺道路空間の確保、緑の確保等を配慮いただいています。しかし、当初は時間・労力の負担が大きいため、地区計画の活用は考えてられなかったそう。これは、施主の地域と未来への思いから実現したものです。また、そのプロセスで施主と地域との関係が築かれたとも聞いています。こういった取組みがこれからも求められます。

門内：京大病院でも、高さ規制20mのところでは31mまでの緩和を行っています。施設機能の公共性の担保、境界部分の敷地の外部への提供、緩和を行わない棟の高さの抑制などを全体のマスタープランで示してもらうことで緩和に至っています。規制を逆手にとり、自身の敷地の景観や環境としてのあり方を見直してもらうという考え方が重要。規制を利用し、工夫を引き出すことが必要です。

門川：なかなかそういった事例は現在、少ないです。敷地にも、施主等の気持ちやポリシーにも余裕がなければ難しいのでしょうか。事業者には工期を短縮したいという意向があり、京都市も手続き等をスピーディにできるように努力が必要でしょう。また、景観政策

の理念を住民や事業者の方に御理解いただくことが重要であると感じています。

鷺田：規制だけでなく、顕彰制度もあると思います。屋外広告物は見通し等の阻害になるとされていますが、褒めるべき看板もあるのではないのでしょうか。

門川：そういった事業は「京都景観賞」として、建物のデザインや広告物部門で何度も実施しており、広告では2000件の応募がありました。表彰に合わせ暖簾や提灯、京都の木材の活用等に対する助成も行っています。素材だけでなく、コンテンツなどもよくしていきたいと考えています。

鷺田：本来、看板はお店や企業のプライドですが、近年は看板にお金をかけなさ過ぎです。昔は書家に書いてもらったり、彫を入れたりすることで、凝った高価な看板を設けていました。ところが戦後は、そういったものに費用をかけないという時代が続いたのではないのでしょうか。見栄を張らなくなっています。

門内：それも自分の敷地だという意識から来ています。都市の顔をつくっているという意識があれば、そうはならないはずですが。洛央小学校でブックワールドという図書館を子どもたちとつくったことがあります。その後、子どもたちと家づくり・まちづくりのワークショップを実施しました。それぞれに家をつくってもらい、それらを集めてまちをつくってもらいました。あるグループの子どもたちは、すべての家の1階をガラス張りにし、そこに宝物を置き、街路

を曲げることでまちを一つの美術館に仕立て上げたのです。それぞれが花を一輪ずつ飾ることで、通りに花が並ぶなどの案もあって、非常に面白かったです。

鷺田：東京駅前の丸の内側で一度だけ、あるビルの出現により景観が汚くなったことがあります。室内の利用者が窓際に書類を並べているのです。京都市も建替えの際は、窓の表情も大事にしてほしいです。

門内：多摩ニュータウンでは、公の道の中に花壇があり、当初は公団が資金を出し綺麗に管理していましたが、市に移管されたたん、荒れ放題になってしまいました。そこで、自分の家の前の花壇は好きに手入れしてよい、ただし通りで話し合っている程度の秩序を保ってくれとしたのです。すると市は負担が無く、市民はガーデニングを楽しみ、通りが再生したという話があります。パブリック・プライベートの繋がりを上手くつくとwin-winの関係を構築でき、景観づくりでは非常に重要です。

門川：見る景観だけでなく、感じる景観が大事ですね。西陣の町やお茶屋などもそうですが、文化が消失し、遺構・遺跡が残ってもそれは本当の景観ではありません。経済・文化の営み、人々の暮らし、歩いている人の笑顔、子どもたちが遊ぶ様、全てを含み景観です。子どもたちが育ち、生活の中に文化が息づき、商いが繁盛する景観をいかにつくっていくかが重要です。

門内：子どもが寄ってくる集落は大丈夫です。インドのムンバイでも、子どもが笑顔

で寄ってくるスラムは大丈夫でした。そこにある人物やファッション等、総合的な事物の総体、それらが全体として個性や雰囲気醸し出しているのです。

鷺田：まちは曲がり角が面白いです。曲がり角は何か誘っているような印象を受けます。大通りではなく、一つ入ったところこそ、まちの面白みがあると思います。昔から入り浸れるジャズ喫茶や現代アートのギャラリー、古本屋等面白い店は、通りから一本入ったところにあつたものです。何かあるかわからないが、何かあるという曲がり角が景観に深みを与えています。

門川：大通りは後から拡幅しているので、昔ながらの店は裏通りに多いのです。細い通りにこそ、歴史があると思いますね。

鷺田：Townscapeという言葉についての説明がありましたが、京都を都市として見るのではなく、小さなtownの集合体として見るとよいのではないのでしょうか。

門内：townのスケールが重要です。京都は120m×120mの街区で構成されますが、町家の間口は平均5mであるため、24軒とれ、通りでは両側町となり、48軒となります。また、日本の一般的な集落のスケール



ルは50戸程度ですから、丁度、伝統的な集落のスケールが両側町で形成されているといえます。

鷲田：一集落50戸ということですが、一世帯3、4人とすると、150～200人と計算できます。人間がすぐに覚えられる顔の数は150～160程度であり、ピタッと合うのは非常に面白いです。

門川：子どもが育ち、文化が継続されるまちが大事です。京都市全体で子育てができるまち、学生のまちとして学術が深化するまち、伝統産業が栄え新たなイノベーションが起こるまちをどうやってつくっていくかが重要です。世界遺産や桂離宮周辺等は当然、景観をより規制してしかるべきですが、京都市全体で見ると、地域ごとの特性に応じた空間のあり方について深く議論できていなかったと感じられ、進化が必要ですね。

門内：最近、パブリックスペースの大切さについて考えています。パブリックなスペースのあり方は景観やコミュニティのあり方と密接に関係します。かつては、近所に神社の境内などがあり、子どもはそこで遊び、そういった空間を見守る大人がいました。都市計画の分野でもパブリックスペースはキーワードとなっています。

鷲田：パブリックとプライベートの境目の設定の仕方がヨーロッパと日本で大きく異なります。ヨーロッパでいうパブリックは自室の外を指します。家族が居合やす空間が最小のパブリックなのです。一方、日本の場合は、家の外がパブリックです。



門内：どこまでがパブリックかを皆で考えていくと景観は変わります。京都はマンションが閉じているので、もう少し中と外がつながる京都型マンションができるといいです。

門川：かつては縁側がそうであったのでしょう。自動車が無かったため、街路に将棋板を出し遊ぶ等、家と外の中間的な役割を担っていましたね。

門内：日本は広場を作らなかった珍しい国です。あらゆることをストリートでやるという文化です。色々なことができる場所は重要です。道路は移動するだけの空間になりましたが、本来はそこに居ることができ、居る人同士がコミュニケーションをする場であったのです。

鷲田：多義的な行動が許される場というのは、コミュニティの形成にも関わってきます。特に商店街などでは、街路から店内が見えるというメリットもある一方、店舗から街路を行く人を見ることが出来ます。隣人に思いを馳せる場でもあります。

門川：御池中学校統合では、学校をつくる際、通りに沿って店舗をつくり、障がいのある方が働けるようにしました。さらに、奥は地域包括支援センターやデイサービス

とし、保育所や公衆便所、コミュニティのスペースも設け、多様な機能を複合しました。昔の関係性のあり方を学校という地域の中心を核に復元しようという試みです。

門内：ストラスブールでは、車の乗り入れを廃止し、LRTを導入した結果、空気が綺麗になり、景観も綺麗になり、ずっと住み続けたいという人が増えました。景観や環境が人をひきつけたのです。良い景観や環境があると人間が集まってくれるのです。それこそ、クリエイティブシティです。

門川：この10年、新景観政策を通じて、京都市の市民力、歴史力、地域力、実行力を実感しました。方針がぶれず進化する景観政策で、市民ぐるみで「創る景観」に取り組んでいきたいと考えています。照明探偵団などの取組みがありますが、夜を如何にすごすかという時代にもなっています。今後は夜間景観にも取り組んでいきたいと思います。

鷲田：景観はコミュニティや住まう人の関係のあり方です。下長者町、堀川のあたりに府営住宅があり、角に鶏屋があるのですが、昼間若い人が間借りして店をしているようで、子どもや若者で溢れています。子どもが多いと、周辺の店もまた、若者嗜好のセンスのよい店ができます。これは一つのメルクマールになると感じました。

門内：景観は健康に似ています。無くなって初めて重要さが解るのです。景観とは総合学であると言いましたが、身体全体が元気になって滲み出てくるものが美しさなのではないでしょうか。緊急措置で規制していくのは仕方ありませんが、京都が本当に健康的な都市になっていくと、真に美しい景観が滲み出してくる仕組みができればと思います。

鷲田：無くして初めてわかるのは、大事な人と幸福です。



2 連続講座

1) 第1回：都市の活力を生み出す景観

平成29年9月21日（木）19：00～21：00

キャンパスプラザ京都4階第3講義室

参加者：約80名

講演



面出 薫

株式会社ライティングプランナーズ アソシエーツ代表取締役
武蔵野美術大学客員教授

「JR京都駅」、「京都迎賓館」、「東京駅丸の内駅舎保存復原ライトアップ」、シンガポールの「ガーデンズ バイザ ベイ」などの照明計画を担当。照明デザインのプロデューサー、プランナーとして活躍するかたわら、市民参加の照明文化研究会「照明探偵団」を組織し、団長として精力的に活動を展開、本年6月には「世界照明探偵団フォーラム in 京都」を開催。



若林 靖永

京都大学経営管理大学院院長、同大学院教授
京都大学大学院経済学研究科教授

商品開発・管理学会前会長、NPO 法人教育のためのTOC日本支部理事長などを歴任。現在、京都市の商業振興施策について助言する「京都市商業振興アドバイザリー会議」議長や「京都市伝統産業活性化推進審議会」会長、「京都市観光振興審議会」委員等。また「新景観政策」について審議を行った「時を超え光り輝く京都の景観づくり審議会」委員(平成17・18年度)。

コーディネーター



大島 祥子

一級建築士事務所 スーク創生事務所代表

講演 1

面出薫

1日の半分の景観は「夜」

太陽に照らされない京都のまちの見え方は、どういうものであるべきか—それは市民自らが作り出すものです。照明により、いやなところを隠して、良いところを上手く見せるというように、市民の意思が働いて京都の夜の景観ができています。

今、世界中のまちが、夜を大切に迎えるようとしています。夜の迎え方、夜の景色は、都市によって価値観が違いますし、都市の形だけでなく、文化やそこで営む市民の価値観などが反映されているのです。(パリ、リヨン、イスタンブール、シンガポール、香港、東京・・・)

照明を文化としてとらえる

そんな中で、京都はいったいどこに向かえばいいのでしょうか。光や照明を文化として捉えると多様な見え方に気づきます。俯瞰したものが夜景ではありません。京都では、町並み、佇まいとしての夜景が大切ではないでしょうか。俯瞰した明かりは、まち明かりの集積でできているため、その明かりを丁寧に作っていくこと、そして京都らしく作っていくことが大事です。京都では色々なイベントや名所でのライトアップがなされていますが、集客のためだけに行うのは少し違うのではないのでしょうか。

近年照明には、エネルギーを無駄遣いしないことが求められています。少ないエネルギーでもよいまちができるということを京都は率先してほしい。京都なら、明りの文化は光の量ではなく質であるということを示していける。京都は、伝統だけではなく、最先端のものを世界的に発信できるま

ちでもあります。ハイブリッドな新しい、最先端の技術、快適性が求められています。

世界照明探偵団

世界照明探偵団は27年前から継続しているもので、毎年一回世界の照明デザイナーが集まり、その土地の人たちとまちを歩き、その土地の明かりの文化について調査・議論する活動です。今年は、6月に京都で開催しました。

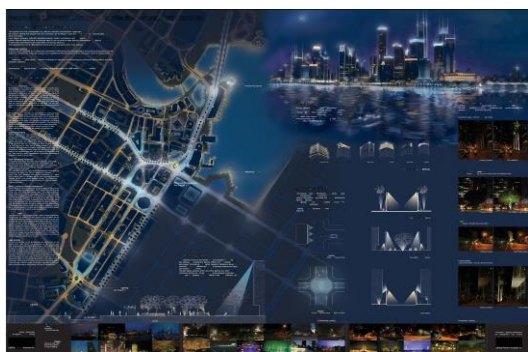
照明の良し悪しは実際まちに出て、見て、光に触れないと分かりません。そうすることで、目が肥え、明りに対する思いが深まります。また、調査の発表の場では、必ず議論が起こります。照明については、それぞれが違った感覚で議論することがなにより大切です。



世界照明探偵団フォーラム2017 in 京都でのライトアップ(松原通)

シンガポールでの取組

シンガポールのライティング・マスタープランには、都市の明かりに対してのコンセプト、それを実現する方法論が書かれています。照度や色、輝度、照らす場所、都市計画の考え方をそのまま光に落とし込んでいます。光の都市計画として具体的にまとめるのです。



ライティングマスタープラン（シンガポール）



シンガポールの夜間景観

京都の街あかりを考える5つのキーワード

- ・ **暖かいあかり**：おもてなしの心や歴史・伝統を考えると、昔から夜には火しかなく、白い光はありませんでした。ところが現代では、昼間を思わせるような白い光が増えています。京都では暖かい光を用い、「おもてなしとはこういうものなんだ」と言えると良いでしょう。
- ・ **陰影礼賛**：安全性は担保しながら、安全性は光の量ではないんだと、「きれいな闇・陰影」が京都ならきちんと言えるのではないのでしょうか。

- ・ **人間尺度**：今までは車社会だったせいで、街路灯は高所から路面に対して大きなエネルギーを与えています。これからは低い位置で、昔あったような明かりを実現できないでしょうか。
- ・ **行灯のような**：昔、辻行燈というものがありました。辻々にある、低いところから拡散した柔らかい光というものは、日本の明かりで一番胸の張れるところです。
- ・ **エコ+最先端**：エネルギーを無駄遣いせず、地球に優しく。そして、スマートライティングでまち全体が制御できるようになる。京都は最先端でありながら伝統を生かした、世界中どこにもないまちができるのではないのでしょうか。



四条通における夜間照明の提案

（左：現状／白色の照明が高位から車道を照らす，右：改善案／暖かい照明が歩行者を照らす）

講演 2

若林靖永

私は京都大学のビジネススクールの責任者として、これからの観光というものを、大きな産業として、そして観光地の再生プログラムとして捉え、また新しいサービス・ビジネスを生み出すような、観光経営人材を育てていくことを課題としています。短期的にはインバウンドで観光ビジネスが伸びていますが、持続可能で、自らの実力で観光を広げていくことができないかということを考えています。来年4月には、観光経営人材を育てるため、京都大学経営管理大学院管理大学院に観光MBAコースを新設予定です。

景観を考えるうえでの観光

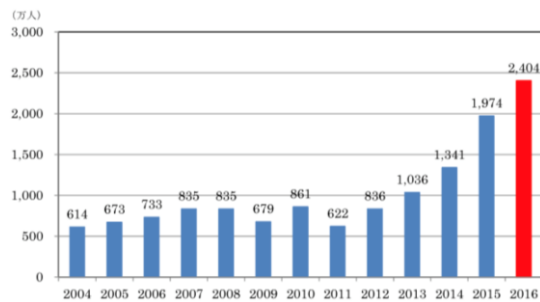
まず今日は、景観を考えるうえで、観光というところからお話をします。

京都では外国人観光客が急拡大し、外国人宿泊客数は300万人を超えています。商業地では、ホテル用地としての引き合いが強く、

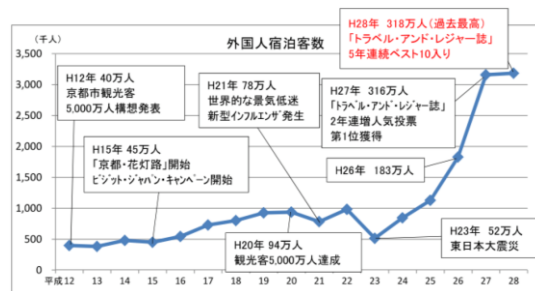
地価も急上昇しています。この観光の伸びの要因は、外的環境がメインです。しかし、同時に京都市が景観を保全するという方針をはっきり示し、この10年間にわたり、景観をよくする努力をしてきた結果、魅力的な観光地の評価につながっています。

京都市の「観光振興計画2020」には、観光に取り組む意義として、「京都の魅力の維持と創出」、「文化」、「交流」、「京都経済のけん引役」ということを挙げており、経済だけが主目的ではありません。平成27年度の京都市景観白書の中では、「景観の政策というものは、都市格を支える様々な要素と、都市格を支える市民の意識、この支え合いによって都市格につながっていく」という一節があり、この都市格を形成するものの一つが観光です。観光の伸びに従い市民生活との問題が起きていますが、前向きに解決に取り組んでいけば良いのです。

京都市の活力の源泉の一つは観光です。景観を守り育てていくということは、京都市の観光を推進していくうえでの重要な礎です。



訪日外国人旅行客数の推移 (日本政府観光局資料に基づき観光庁作成)



外国人宿泊客数の推移 (京都総合観光調査2017)

京都観光振興計画2020

目指す姿 : 世界があこがれる観光都市

1. 多様な景観資産、自然景観と文化資産を守り、育て、創造的に活用をすすめるまち
2. 旅と暮らしの安心・安全が世界一しっかりと守られているまち
3. ひとと公共交通を優先する、歩いて楽しいまち
4. 市民ぐるみで観光客の皆様をあたたかくお迎えする、おもてなしのまち

長期的な視点で見ると「景観十年 風景百年 風土千年」(佐佐木綱 他)

もっと長期的な視点で見るとどうなのでしょう。『景観十年 風景百年 風土千年』の著者である佐佐木綱氏は、それぞれの都市の個性、歴史、アイデンティティを踏まえた都市設計を目指し、地域の「心」を考える「風土工学」を主張されました。最適化原理ではなくて、個性化原理が重要であり、パーソナリティやアイデンティティにこだわらないと、歴史的に後世に残るまちにはなりません。京都はそういったこだわりを持ってつないできたからこそ、後世につながるまちになっています。京都を千年後まで残そうとすると、そのパーソナリティを大事にしていくということがないとダメになってしまうと提唱されました。

佐佐木綱氏は次のようにも述べています。「景観は10年で変わる。それでも残るものは風景。風景も100年すれば変わる。それでも残るもの、繋がっているもの、大事にされているものが風土である。1000年という長いスケールの中で、大事にされてきているものを風土ととらえよう。そういうものが京都や歴史のあるところに存在していて、その風土特性をちゃんと踏まえて、後世に残していくまちづくり、都市計画、景観ということを考えるべきだ。」と。同時にそれは人の心を大切にすることです。新しい景観というものをどう受け継いでいくかということは、つまり、人の心の中でどう受け継いでいくかということです。私たち自身が誇りを持ち、その価値に共感し、参加することで、新しい京都文化や都市の活力につながっていくのです。

平成28年度の京都市景観白書データ集では、「京都の個性的な町並み景観が守られている」と感じる人の割合は、10年前と比べて増加しており、景観に対する評価が広がっているということが確認できます。新景観政策というものは、景観を未来に向けてコントロールしようと京都市民が決めたということです。この意志は未来に向けての風景を大事にしようというものであり、そのことが風土を受け継いでいこうということにつながっていくのです。景観を大事にするということが、風景、ひいては風土を尊重していく態度、文化、私たちの生活の営みというものに繋がっていくのではないのでしょうか。



『景観十年 風景百年 風土千年』
佐々木綱・巻上安爾・竹林征三・廣川勝美
・神尾登喜子
蒼洋社 1997年

トークセッション

コーディネーター：大島祥子

景観とはなにか？

大島：はじめに、「そもそも景観とは何か」についてお考えをお聞かせ下さい。

若林：景観は二通りの見方があると思います。一つ目は目に見えるもの。一方で、私たちは写真のように景観を見ているのではなく心で見えています。「そうだ京都、行こう」のポスターが好事例ですが、京都では見たことがない風景を皆、京都だと思ってしまう。それは私たちの心にあるイメージとしての景観です。私たち市民にとっても、観光客にとっても、実は心の中にある景観が重要なのではないのでしょうか。

面出：いまのお話を受け、2次元の写真1枚では景観を表現しきれないと思いました。実際そこに行ってみないといけません。景観というのは2次元や3次元ではなく、時間軸を持つものでしょう。景観は、自分がそこを移動するという連続的な体験があってこそそのものです。連続した心持ちが自分に与える感動だと思います。

大島：視覚だけではなく、匂いや触感・音等、五感を通じて総合的なもので感じる景観が大事だということですね。

面出：照明デザインにおいて、最終的に大事なものは気配です。気配は目に見えるものだけではなくありません。門内輝行先生が言われるように、風や遠くの音など、京都には異なる気配があるというのが魅力だと思います。

都市の活力とは？

大島：照明は、建物を変えなくても、夜の景観を演出することができます。その特性を踏まえ、都市の活力と結びつけてお話し

を伺います。

面出：中国には人目を引くための照明が多いです。非日常的な光を作ると皆、驚嘆します。そういう意味では、活力とは、あるところで、アトラクティブ（人の心を引き付ける）なものが必要なかもしれませんが、住民には不快になりかねません。まちには、日常と非日常（ケとハレ）が必要です。活力を与えるということは、これ見よがしにやるということが重要ではありません。日常が守られながらハレの日があるということがいいのです。時間軸を使って活力を考えるべきです。また、まちを歩いて何となく気持ちが良い、角を曲がるとあつという風景に出会う、そうした連続した気持ちの動きがあって、ふと立ち上がってくるものがたたくまいです。そういう連続性の中での、気持ちの抑揚のつけ方が重要です。明るく激しいところだけでなく、闇も必要だし、きれいな影も必要。気持ちの良いコントラストが大切です。

大島：来訪者との交流という観点で考えると、シンガポールには観光客が多く訪れていますが、明かりの演出と活力は市民の中で、どういう風にとらえられているのでしょうか。

面出：シンガポールは多様な民族が住んでおり、年中色々な祭りがあって、それを尊重しています。また、昼間は暑いので外に出ず、夕暮れになってから外出します。シンガポールでの光のデザインは、昼間にきれいな影を作ることです。快適なまちをつくるには、そういうものも必要なのです。明るいライトアップもありますが、様々な

活力の見せ方があります。

大島：観光について、若林氏にもお聞きします。民泊の増加には様々な議論がありますが、市民の暮しと観光の軋轢、活力の関係性についてはいかがでしょうか。

若林：活力は、2通りの見方があります。ビジネス・経済面では、投資の大きさ。もう一つは人間（市民）が健康的な暮らしをしていけるかどうかです。この投資と健康は、投資が増えると人間が不健康になるという対立状況が起こりやすい関係にあります。活力というのはダイナミズム（運動）であり、調和などは結果にすぎません。ダイナミズム（運動）には矛盾があるものですし、矛盾がダイナミズムを生み出します。例えば、投資と持続可能性の矛盾の中で、ビジネスは行われています。同様に、健康は大事であるが、人間は不健康が好きです。京都の都市が魅力的なのは、不健康な世界があるからです。それらの両方が大事であり、バランスが重要です。観光と市民生活の間には軋轢が生まれるもので、かつてハワイでは日本人観光客が増加し、大問題となっていたそうです。しかし、それに対してハワイの人たちは丁寧に優しく日本人観光客を受け入れたため、どんどんマナーも良くなり、ハワイを愛する日本人が増えました。日本でも旅行者には優しくするべきです。対立をいかに乗り越えるかというところに調和があります。受け入れないということは、調和ではありません。閉鎖的で、衰退、没落の道が待っています。

交流と景観

大島：観光客と市民との対立軸ではなく、交流しながら心地よい景観をつくるためのヒントはあるでしょうか？

若林：マーケティングの研究で出てくるサービス体験というものは一人ではありません。例えば、食事や野球観戦をする際、一人ではなく周りで楽しそうにしている家族や仲間がいる、そういうつながりがあって私たちはサービスを体験します。観光も同じで、哲学の道も、色々な人が色々な身なりで色々な思いをもって歩いているという印象を持って道を見ます。観光客も景観の一部で、私はそういう哲学の道が好きです。さらに、声をかけられたりする経験を得ると交流が生まれます。交流の様も私たちは景観として受け取り、そこが素晴らしい場所であると認識します。人と人の出会いというものを如何に組み込むか、居心地良く安心して交流が出来る場にできるか、それが景観の提供すべきテーマだと考えます。

大島：交流も含めて人々のアクティビティで景観が形成されるということですね。京都では、市民は観光に対してどうしてネガティブになるのでしょうか。よく言われるのは、市バスが混んでいたり、時間通りに来なかったりするといったことですが。

若林：それは、観光客が増加していることが問題なのではなく、現状に対応できていないだけで、設計や運行を改善すれば良いのです。未来志向で前向きに取り組むことが重要です。

面出：シンガポールでは、時間帯の区別等、市民生活とすみ分ける仕組みがあります。そういうことが市民生活を支えているのではないのでしょうか。

景観形成の手法

—誰が景観を作っていくのか？

大島：景観を作っていくための手法、主体についてお伺いします。

面出：日本人は、まだ気持ちの良い光、不快な光について理解が深まっていません。丁寧に実験することで、市民の明かりに対する文化的レベルを引き上げることが大事です。実際の光をよく見る癖をつけて、対立を恐れず意見を言い合うことが景観を形成するためのボトムアップになります。明るさにしても、色の数にしても、何が美しいのかということさえも人の価値観によります。良い味のものを食べていると、良い味がわかってくるように、光についても感性を高めると、美しいものは何なのか、気持ちの良い光は何なのか、そういう議論が生まれます。

若林：景観の議論でも、観光の議論でも、観光地や夜を楽しむまちと、住宅地を都市計画的にデザインすることが必要です。ゾーニン

グをどうしていくのかというコントロール、誘導・調整が必要なのではないでしょうか。

大島：最後に、景観形成の参加、プレイヤーをどう考えていけばいいかお伺いします。

面出：最終的には、市民の意思が優先されるべきですが、外から来た人、意見に差異のある人と話をすることが大事です。光については、実際に体験することが重要なので、京都では様々なところで明かりの社会実験が行われ、議論の土台ができることが大事だと思います。

若林：京都はこうありたい、私たちはこう生きていきたいという理念を具体的に形にする営みこそが、景観形成の参加と創造なのではないでしょうか。こうあるべきではないかということ、考え続ける、話し合い続ける、ということの営みの先に答えがあるのではないのでしょうか。



会場の意見・感想（アンケート）

- 「形態」を「規制」することを主体として取り組んできたステージから、少しちがうステージへと向かうべき状況になってきているのだと思う。（40代、男性）
- 景観に対して建築以外からのアプローチもあってよいと思う。（50代、女性）

- いやな光を取り除く（面出先生）、インバウンドの問題には「改善すればよい」（若林先生）、など、2人の先生の現場感覚に立ったシンプルで深い話がよかった。（60代、男性）

2) 第2回：コミュニティと景観まちづくり

平成29年10月5日（木）19：00～21：00

キャンパスプラザ京都4階第3講義室

参加者：約80名

講演



田中 志敬

福井大学国際地域学部講師

同志社大学大学院社会学研究科（旧文学研究科）博士後期課程を単位修得後退学し、（公財）京都市景観・まちづくりセンターのまちづくりコーディネーターを経て現職。専攻分野は都市社会学，地域社会学。研究課題は町内会・自治会（地域住民組織），まちづくりなど。

執筆分担を行った書籍として、「まちづくりコーディネーター」、「京都の「まち」の社会学」、「町内会の研究（増補版）」など。



嘉名 光市

大阪市立大学大学院工学研究科教授

東京工業大学大学院博士後期課程修了後，U F J 総合研究所主任研究員，大阪市立大学講師を経て現職。

大阪市，神戸市など関西圏を中心に，公共空間の活用社会実験やエリアマネジメント活動に取り組む。「水都大阪のまちづくり」で日本都市計画学会石川賞を共同受賞，主な著作に「都市を変える水辺アクション 実践ガイド」（編著），「生活景」（共著），「景観再考」（共著）など。

コーディネーター



杉崎 和久

法政大学法学部教授

京都の自治と景観まちづくり

田中志敬

京都の景観まちづくりは

「うなぎ屋の秘伝のタレ」

京都のまちづくりや景観は、もともとあるものを少しずつ変化させながら、守るものは守って新しい要素を入れてというふう、「うなぎ屋の秘伝のタレ」みたいなものだと考えています。

京都では、住民自治や住民による意思決定が割と多くあります。現在は、地域景観づくり協議会という取組が始まっており、同協議会を設置しているところは、事業者と地元が膝を突き合わせて協議する場が設けられています。住民と新たに建築する人とが関係をつくるという意味では、新しい試みですが、これは、もともと住民自治で行っていた取組を、京都市が条例化したものに過ぎません。

この協議会制度ができる前にも、地元が住環境を守るための制度としては、地域協働型地区計画や建築協定などの制度が活用されてきました。さらに、何の法的拘束力もありませんが、80年代、90年代の建築紛争が起きたときに、地元として大切にしている、守りたいものを何とか形にしようと、まちづくり憲章や町式目がつくられています。こうし

た取組は、その土地土地の歴史や想いの蓄積がありなされている例が多いと思います。

現在の住民自治

住民自治は、基本的に町内会があり、それが集まった自治連合会という組織が元学区単位でできています。町内会と自治連合会が住民の意思決定機関で、自治連合会の中には、防災や福祉など、テーマごとの各種団体がああり、景観づくりも一つのテーマになっています（明倫学区、修徳学区等）。

住民自治に係わる人の割合は、例えば自治連合会の役員（意思決定する人）が人口の約1%、さらに委員（汗をかき人）は、人口の約7%で、なんとかまちが守られているというのが現状です。人口が減少する中で、持ちこたえられるのが課題です。

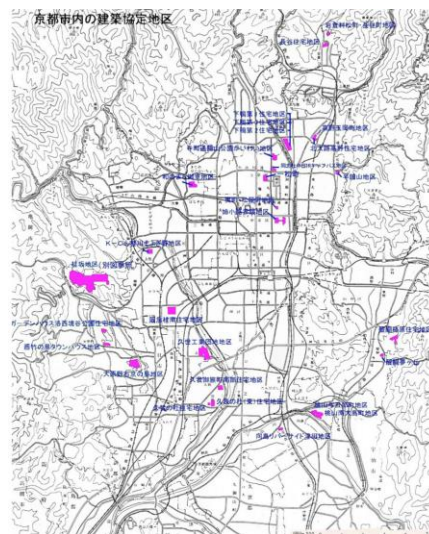
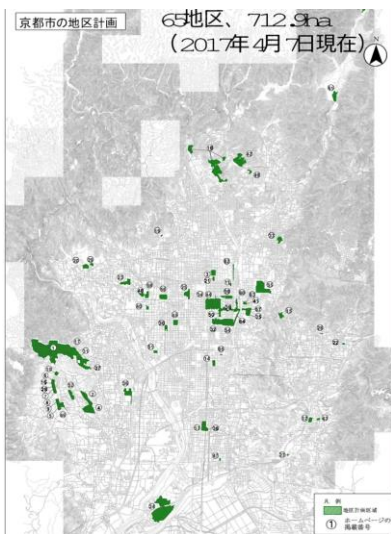
住民自治の歴史

一防衛から住環境へ 揺れ動く自治

住民自治の歴史文化的な背景やルーツを探ると、室町時代後期の町と町組に行きつきます。当時、応仁の乱の中で、命や財産を守らないといけなかったのですが、個人では守りきれなかったため、両側町を結成して団結し、共同防衛

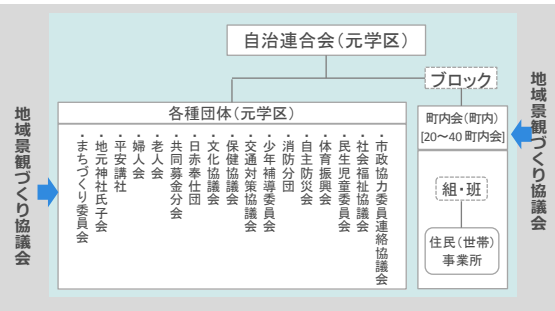
をしました（木戸門の設置や武装等）。これが共助のはじまりです。しかも、1町内だけでは両側町の裏側が守れないため、隣の町と手を組むようになり、町組が作られました。

ところが、次第に治安が安定してくると、命に関わるような共助



京都市の地区計画(2017年4月現在) 京都市内の建築協定地区

- ① 町内会と元学区(対応する住民組織は、自治連合会+各種団体)の二層の自治体制
- ② 1990年代に小学校の統廃合を行ったが、元学区は依然として広域コミュニティの範囲のまま維持
- ③ 住民・事業者は世帯単位で町内会加入し、世帯主が選挙・輪番制等で町内会役員を選出。町内会長と各種団体長・委員が元学区の自治運営を行う。
- ④ 運営資金は、町内会は各世帯が払う町内会費。元学区は町内会費上納分を各種団体に再分配する(各種団体はこれに行政からの補助金等を加えて活動経費とする)



景観の基層となる現在の京都市の住民自治組織

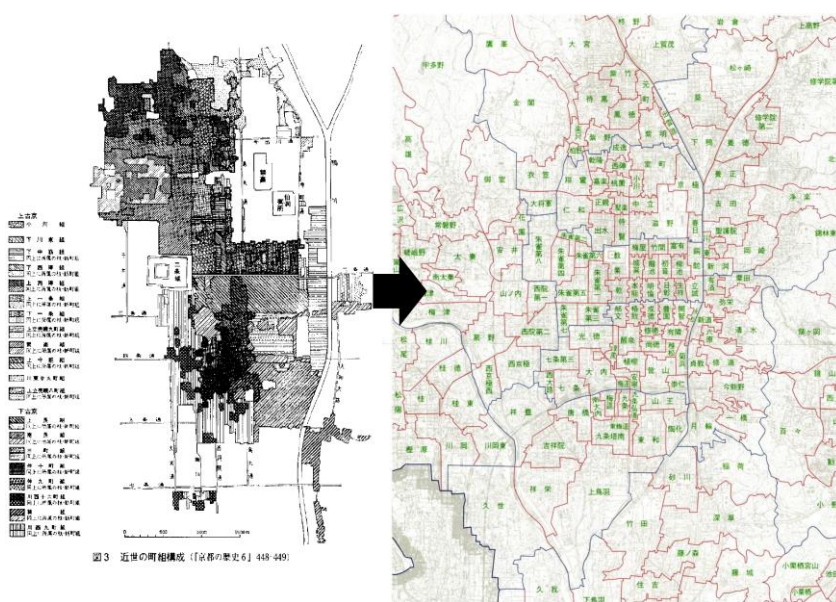
に時間を割かなくてもよくなりました。江戸時代には、自治の形骸化が起こります。町や町組が、町内独自のルールとして町式目や町規ルールを作るようになりましたが、それがうまく回り始めるとマンネリ化という落とし穴がありました。特に町組では、仕事が多すぎたため、町代という代理人を雇って業務を全て外部委託してしまい、その結果、乗っ取られるという事態が起こります。それで、地元は自治権を取り戻すために、町代改儀という大裁判を行って、自治の改善が行われました。そして、明治時代になると、もともと職業的なつながりの町組から、地理的なつながりの番組ができました。このように、歴史的に見ても自治力は揺れ動くものなのです。

現代の課題

1950年から2015年までの各区別の人口にみられるように、人口減少と人口増加が並列して起こっています。人口増加は、中京区や下京区など、マンション建設により起こっていると思われます。ここでは新住民と旧住民が一緒にどう自治をするか、どう景観をつくっていくかを考えなければなりません。一方、東山区など、人口減少が進行している地域において起こりうる課題は、住民自治でも景観でも、それを守る人自身が失われていくことです。この2つに京都市の住民自治が対応していかないと、どのテーマであってもまちがもたない。一番重い課題だと思います。

景観問題は難しい話

ですが、人口増加の場所では、新しい住民、未来ある住民の価値観が意思決定から排除されるおそれがあるということ、人口減少の場所では、担い手不足や活動の省力化、効率化が課題であることを問題提起します。



近世の町組構成
(「京都の歴史6」448-449)

現在の学区

講演 2

嘉名光市

私は京都以外の話をして、参考にしていただけたらという役回りだと思ってお話をさせていただきます。今は大阪市立大学で公共空間の活用やエリアマネジメントを行っています。

船場での社会実験

まずは、船場で行った社会実験の話です。船場は、豊臣秀吉が400年ほど前に作ったまちで、伝統的なところが意外と残っています。震災で町並みは崩れてしまっていますが、コミュニティ（町会）は残っています。ここでは、地域を活性化していくことを目標に、特に働きに来ているひとにまちの魅力を知っていただくという取組を行いました。公開空地でコンサートをしたり、店舗で寄席をやったり、コインパーキングをパブにしたり。このまち、もっと使い道がいっぱいあるんじゃないかということを知りたいという試みです。今は地元の方と共同で実行委員会を立ち上げ実施しています。

水都大阪

大阪はかつて水の都で、近世は舟運がメインのまちでした。大正時代にはまちの中を縦横無尽に水が走っていましたが、道路にするために埋立てたり、舟運の意味がなくなったりしていきます。それを復活させようというのがこの水都大阪という取組です。

大阪が水の都というのは誰も知らないし、水辺に行くというライフスタイルすらないところで、水辺をもう1回面白いところとして、再整備しようと思いました。天満橋の駅前、伏見と続いていた航路だった八軒屋浜は、観光船も乗り入れられるよう水辺の

空間を再整備しました。道頓堀でも遊歩道を整備しましたが、ハード整備だけではうまくいかないことに気づき、ソフトのプログラムを充実させるようになりました。

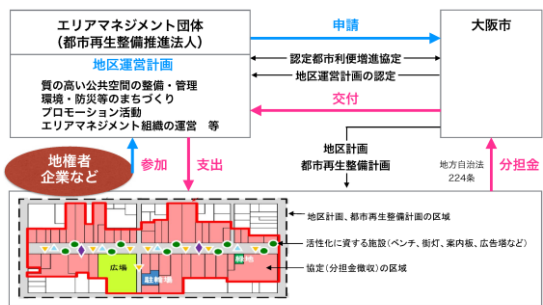
それから、北浜テラスの取組。河川占有は京都の床を勉強して、北浜水辺協議会が行っているもので、河川空間に張り出して川床を作るというもの。水辺協議会が河川空間を管理しています。



水都大阪の取組
(水都大阪パートナーズ資料をもとに嘉名光市作成)

エリアマネジメント

大阪市では平成26(2014)年、橋下市長の頃に BID 条例 (Business Improvement District/大阪エリアマネジメント活動推進条例) ができました。大阪市のエリアマネジメント団体を認定し、エリアマネジメント活動を行います。その時に、地域からお金を取って、それを活動費



整備等実施期間5年

大阪市エリアマネジメント活動促進条例(大阪版 BID 条例)(大阪市資料をもとに嘉名光市加筆修正)

に充てるということを実現しています。大阪では、都心に大規模な公園や屋外スペースがないため、道路や河川等の公共空間を魅力的に活用しようとしていることが多いのです。町内会も必ずメンバーに入っていますが、周辺の企業、商店街組合の方も一緒に取り組んでいます。

生きた建築ミュージアム

「生きた建築」とは、私たちが新たに考えた言葉です。文化財ではありませんが、ある時代の歴史文化、市民の暮らしぶりといった都市の営みの証であり、様々な形で変化・発展しながら今も生き生きとその魅力を物語る建築物等のことです。都市を生きた建築を収めるミュージアムとしてとらえ、そのまちを巡っていくという楽しみを新たなまちの価値づけとし、又は新しい建

築の楽しみ方として提案しています。今年には101件公開予定です。

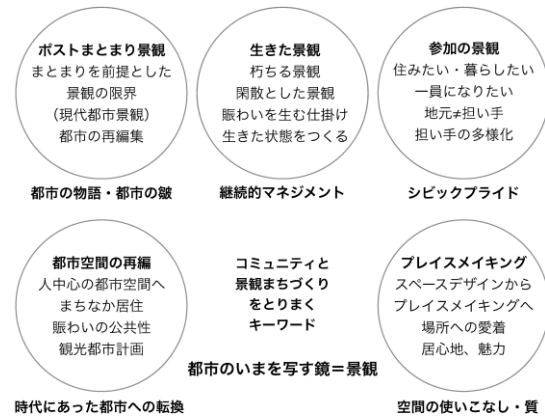
大阪の景観まちづくり

大阪の場合、同じ時代に造られた建物がまとまっていて、それが景観の良さということではもう景観を語れません。断片的に残っているものに価値を見出して、皆で合わせていく、皆がいいと思うものを共有して生み出していく、そういう景観の作り方があるのではないのでしょうか。それから、もはや建物が必ずきれいに維持される時代ではありません。だから、生き生きした景観を作っていく、維持していくというマネジメントが非常に重要です。そして、地域の活性化の点では、一緒に自分もそこに関わりたいと思うことが重要です。活動に参加する人は、地域にとっても非常に貴重な資産になるのです。



(C)西岡潔

生きた建築ミュージアム・大阪セレクション
(大阪市生きた建築ミュージアム事業 西岡潔氏撮影)



(嘉名光市作成)

トークセッション

コーディネーター：杉崎和久

杉崎：今日のテーマは、「まちづくり」がついているのがポイントです。景観をつくる主体は様々。行政も、規制のルールを作ったり公共施設空間を作ったりする役割があります。京都の地域のまちづくりを見ると、やることはたくさん増えていますが、高齢化や担い手の人達の問題を抱えています。大阪では色々チャレンジされている。新しい人たちとの関係をどうするかを視野に入れたとき、大阪の話は色々なヒントがありそうです。そのあたりを深めていきたいと思います。

京都と大阪—まちづくりの担い手

嘉名：大阪の都心で船場のまちづくりが進み出したきっかけは、まちをなんとかしたいけど、住民はほとんどいない。だから、活動を継続し活性化していこうとすると、住民以外の方と一緒にやるしかないというところがベースにあったように思います。企業の方、新住民の方、色々な人がいるが、地域のために貢献するのは当然だと思っっている方はたくさんいます。きっかけはいろいろありますが、住民以外の方がまちづくりにどんどん入ってくるということで、うまくいきました。京都ではそういった動きはないのでしょうか。

田中：今までは自治連合会が学区を保守していましたが、最近では市民団体がマンション住民や若者を集めて何か面白いことが出来ないか考えられていて、転換期を迎えているところもあります。大阪と京都を比較すると、京都は自治会で何とか乗り切れるほどのストックがまだありますが、大阪は、それが失われた時から新しい価値を入れようと開放的な話もあり、そうしなけれ

ば動かせない切実さもあって、そこが違うのではないかと思いました。そもそも、背景には、京都と大阪の都市の成り立ちや物事の動かし方の違いがあると思います。京都は町内会、大阪は商業者が支えています。ただし、明倫学区では住民の8割以上がマンション住民になっています。はじめはマンションの反対運動をやっていましたが、それでは地元が維持できないことに気づきました。マンション住民とも次第に垣根がなくなり、今までの先人たちが守ってきたものを守るためには、リスクがあっても若い人、新しい人を受け入れるという判断に切り替えたのです。一方で、京都は事業者との連携が不得意です。いわゆるよそ者や新しい人と組む、ということは、将来的に京都には必要だけど文化的に慣れていません。大阪では、お互いの信頼関係をどう作っていったのでしょうか。

嘉名：毎年船場フォーラムを年度末にやっていますが、7、8年前のテーマは、タワーマンションの住民とどう向き合うかでした。しかし、京都と同じく、会ってみると意外と普通の人なのです。実はまちのことが好きな人も結構いて、だんだん普通の関係になっていきました。また、梅田では、小学校の統廃合で地元の人達は盆踊りをする場所がなくなって困っていました。すると、エリアマネジメント団体が声をかけてくれて、大阪駅のすぐ目の前のうめきた広場で盆踊りができるということになり、みんな張り切りました。お互いの利害が一致し、一緒にやろうという、うまくいくきっかけがありました。自然とすんなりいったというよりは、それやろう、そ

の指とまろう、ということがそれぞれの場所で、ケースは違いますが、あったということだと思います。

杉崎：この指とまれ、と言うのは、既存の町内とは別の担い手なのでしょうか。

嘉名：どっちかというところなんです。ふらっと来たよそ者みたいな人が結構重要なのです。水辺も、もともとやっていたのは伝統的なコミュニティの方々ですが、そこに色々なことを面白いねと言いだしたのはよそ者の人です。ただ、大阪の場合も地元の連合町会の会長さんには必ず話をするというのが、京都と似ているところだと思います。

京都と大阪—まちづくりの手法

杉崎：大阪では、新しい空間の使い方や魅力を提案されている活動が多いですね。今まで体験したこともないような空間の使い方をしようという提案があった時、その進め方はいかがでしょうか。

嘉名：北浜の水辺協議会、北浜テラスの事例が典型的かもしれません。河川敷地占用許可準則の占用の特例措置で緩和できそうだとするとき、地元から提案がありました。マネジメントする仕組み作りや川床の景観のデザインの審査など、行政ではなく自分たちでコントロールをするという条件付けをして実現しました。大阪では、もともと、道頓堀は安井道頓が作ったり、心齋橋は岡田心齋が架けたりして、公共空間は町人が作って、管理するものという感覚が伝統的にあるように思います。自分の家の前の道は自分のもの、私物化するだけでなく、共有物として使う。そういう感覚がベースにあるのでしょうか。

杉崎：エリアマネジメントの話、プロモーションなど、京都の状況はいかがでしょう。

田中：京都もやっていますが、規模が違い

ます。私が知っている限り、京都では関わる人が専門知識を生かしながら半分ボランティアでやっています。それが京都のいい所であり、大きく展開するには限界があるところなんです。大阪はエリアマネジメントに関わる人たちが、若い世代を含めて育ちやすかったり自立しやすかったりする環境があるのででしょうか。

嘉名：エリアマネジメントは、地域によって状況が違います。しかし、例えば御堂筋の車道をなくして歩道にすることは、地域としても重要な問題だから地域も考えようというきっかけがありました。整備もマネジメントも、標準スペック以上のことは自分たちが頑張るしかないことを思い出すのです。後は、防災が非常に重要です。実はすごく地道なこともやっていて、むしろきっかけはそこです。もっとまちを魅力的に楽しくしていくという夢の部分がないと人は集まってきません。そこで、うまくバランスをとってやっています。

杉崎：空間を楽しむことや、楽しみ方を広めること、そのあたりが大阪の話では貫かれていました。そこと景観の関係、やはり楽しく使っているとその空間がわくわくするようになるのでしょうか。

嘉名：京都みたいに、誇れるべき景観というものがまとまりとしてありません。ただ、パーツで見ると、確かに面白いものがあるかもしれない。それは、解釈する人や何かストーリーがないと、その面白さの意味がありません。伝えていく、価値を共有していくプロセスが非常に重要なのです。

田中：京都は最近若い人が増えて、今までのやり方から転換期を迎えていると思っています。まちで遊ぶ、まちで過ごす、とい

うライフスタイルができないと、新しい人も愛着を持ってません。そのまま古いものを守るだけだと押し付けになってしまうので、懐深い所も少しあれば、京都も新しい展開、色々な可能性があるでしょう。残す話と新しい話の両方の可能性を秘めているまちだと、より面白いのではないかと感じました。

杉崎：大阪の御苦労も踏まえながら、京都がこうなってくれたらより魅力的になる、というあたり、いかがでしょうか。

嘉名：先ほどの防災の話に関係しますが、今のまちをマネジメントする仕組みはすでにあります。それはしっかり組みあがっているし、日常やらないといけないこともたくさんあります。しかし、それでは持て余すような大変な問題もたくさんあります。昼間人口の増加により、昼間の災害対策については企業が真剣に考えないと、自治体では対応できない問題です。

そして京都はまさに観光問題もあります。時代に合った新しい枠組みが、既存のものとうまく重なりながら響きあい、新しい秩序をつくっていくことがあってもいいのではないのでしょうか。

杉崎：京都の場合、まちの構成が大きく変わってきているというのは認識されていますが、そこには新しい住民や新しい企業がいるわけです。そういう人たちと一緒に、まちで楽しむだけではなく、安全性も含めて、新しい構成員の方と一緒にまちのことを考えていくという、意外と地味だけどコツコツしたことが大事と感じました。また、大阪の写真をを見せていただいて、身近な空間を週末も夜も楽しそうにしていく、そういう空間が身近にあったときに、まちの見え方は少し変わってくるのかなと感じました。



会場の意見・感想（アンケート）

- まちを使いこなすアイデアがいっぱいで、楽しい話が聞けてよかった。(50代, 男性)
- 大阪での公共空間の利活用やエリアマネジメントの話は、具体的で大変興味深い。まちの活性化の幅が広いと、多様な人々が参加しやすいと思いました。京都の場合、古い街並み、京町家を残す話が中心になりがち。(60代, 男性)
- 町はやはり外からの目線と地元の感性の共動が大事かな。(女性)
- 大阪楽しそう！ぜひ体験したいと思いました。京都でも新しい一歩をふみだすことを恐れてはいけないなと思いました。(40代, 女性)

3) 第3回：景観を紡ぎ出すデザイン

平成29年10月19日（木）19：00～21：00

キャンパスプラザ京都4階第3講義室

参加者：約110名

講演



中村 良夫

東京工業大学名誉教授，元京都大学教授

東京大学（土木工学），東京工業大学（社会工学），京都大学（土木システム工学）にて，景観工学の研究と教育に従事するかたわら，市民学としての風景学を提唱。広島の「太田川堤防」，「多摩ニュータウン上谷戸橋」，「羽田スカイアーチ」，「広島西大橋」，「古河総合公園」などの計画と設計に景観工学の理念と手法を導入。主な著書に「風景学入門」，「風景学・実践篇」，「都市をつくる風景」など。



青木 淳

株式会社青木淳建築計画事務所主宰，建築家，
東京藝術大学客員教授

東京大学大学院修士課程（建築学）を修了後，磯崎新アトリエに勤務し，平成3年に青木淳建築計画事務所を設立。代表作に日本建築学会作品賞を受賞した「潟博物館」や，「レイ・ヴィトン表参道店」，「青森県立美術館」など。市民との協働による「十日町ブンシツ」での活動は，地域・コミュニティづくり／社会貢献活動の部門で，「グッドデザイン賞2016 ベスト100」を受賞。西澤徹夫氏と共同で，京都市美術館再整備工事の基本設計を手掛ける。

コーディネーター



中嶋 節子

京都大学大学院人間・環境学研究科教授

講演 1

中村良夫

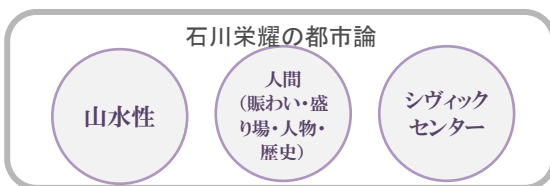
京都大学に勤めていたこともありましたが、今は東京に住んでいます。そこで、遠いところから京都を眺めていて、こういうところがおもしろい、これからの景観を考える時に、どのような枠組みで景観を考えたらよいかといったことに焦点をおき、お話ししたいと思います。

名都の条件

都市計画界の大御所である石川栄耀先生は、「名都」という言葉をお造りになりました。名勝、名画という言葉はあっても、名都という言葉はあまり聞いたことがありませんが、まさに京都は「名都」であり、そうあるべきと考えます。

石川先生が挙げた名都の条件は三つあります。一つは、山水性。もう一つは、シビックセンター。都市を代表するような行政、美術館などが一つのグループをつくって、都市の中心性を表しているものです。そして最後の一つは、人間です。人物や、人物がつくってきたまちの歴史等、特に石川先生が最も関心を持っていたのはまちの賑わいです。人々が沢山集まって楽しく団欒している姿が都市にとって最も尊いということ仰っています。簡単に言えば、「盛り場」をもっと大事にせよということです。

私が考える名都とは、一言で言えば、都市の持っている風土性の表現だと思います。風土というのは歴史によってつくられてくる自然と人間の調和の姿であり、景観は、結局



名都の条件＝風土性の表現

は風土の表現になるだろうと思われま。本日は、あまり時間もないので、風土というものを割とよく表している「ニワ」と「風物」、この二つの言葉に話題を絞ってお話ししたいと思います。

ニワとは何か ニ(土) + 八(場, 庭)

日本の都市の広場とは何かという問題だと考えていただいてもいいと思います。古い日本語の「ニハ」には、「共同体の行事・作業の場所」と「山水のお庭」の二つの意味がありました。私は、日本の「ニハ」の原型を考えたとき、かつてはこの二つを兼ねていたのではないかと思います。「盛り場」というニハは、何か共同体が行事をする場であると同時に、日本の場合、非常に清々しい緑や水があるのが普通です。それは、寺社仏閣を使うからで、東山の六道珍皇寺が有名です。また、生け花発祥の地として知られる六角堂は、聴衆が寄り合う中世のシビックセンターであり、芸能が集まり賑やかで美しく美しい日本の盛り場の原点だと思います。こうした盛り場というものをこれからも大事にして、新しいタイプの盛り場をつくっていくべきではないでしょうか。

京町家の「ニハ」には、山水的な坪庭と家族共同体の作業場である「トオリニハ」がありますが、私が今日申し上げたいのは「ノキバ」というバです。建築業界では通り庇と言



- ニハとは…
- ハ(場)とハ(庭)の二つの意味を有する
 - 風土と戯れる場所
 - 盛り場というニハ

軒場(通り庇)の飾り



通り庇の飾り（軒場の風物）

左：結界の奥の気品を伝える風物（京都）

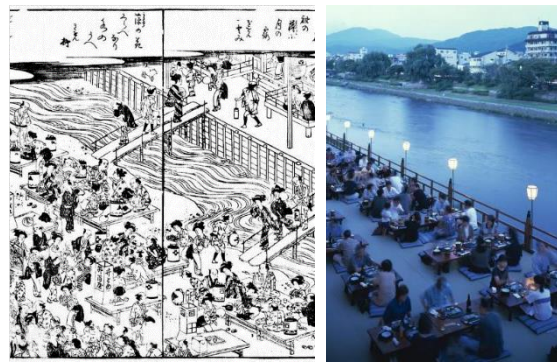
右：空地の場合（倉敷）

われていますが、その下にもニハがあるのではないかと思っています。小さな山水（鉢植え）やバツタリ床几が置かれ共同体に関係のある「場」なのではないでしょうか。また、水辺のニハは、都市の縁側のような場所です。私的な空間と公共的な空間がうまく一つになっているのがニハの面白さです。

風物詩の世界

風物とは、風土の俳句的断片のようなものです。風景というのは絵画的な構想を持った、大きな構成物ですが、風物はもっと細かいもので、毎日の食事やおかずも含みます。おぼんざいは季節を敏感に反映している風物です。小さなものですが、非常に大きな意味をもっていると思います。小さなものの中に、京都というまちの持っている、風土が持っている市民性を非常に強く感じます。地藏盆など、京都市の無形文化財と景観政策とが手を組み、大きな風土という概念でまとめて考えると、一層やる気が出てくるのではないかと思います。

そして、そのような風土の中心となるのが人物です。人間そのものが景観政策の課題かと言われると難しいですが、風土政策にはなると思います。風土は市民が自らつくるしかなく、それこそが正にまちづくりです。これからの10年を考える時に、今



ニハとしての鴨川（河原広場の近代化）

左：幕末の四条河原（都市の縁側）

右：近代化された水辺広場

までやってきた規制を中心にした政策は、それはそれで貴重なものだと思いますが、それを続けながら、もう少し枠組みを大らかに捉え、市民による市民の風土をつくっていただきたいです。

風物詩の世界 - 風土の俳句的断片 -

私と社会をつなぐ、
風景より身辺にあって、社会性の強いもの
(記号的流通性)

- a. 季節感のデザイン
- b. 文化の多分野をつなぐ
(芸能・祭礼・食文化・服飾・建築・造園・言語)
- c. 断片的にして宇宙的
- d. 歳時記的体系性

講演 2

青木淳

京都市美術館再整備工事の基本設計を手掛けています。その経験のなかで感じていること、難しいと思っていることをお話ししたいと思います。

京都市美術館再整備工事

京都市美術館は、昭和天皇の即位を記念してつくられ、その後80年間、京都の方々に愛されてきました。しかし、80年も経ってみると、美術館として求められることが変わってきています。例えば、かつては限られた人が来ていましたが、今はどなたでも多くの人に来てほしい。そうすると、入口のあたりには、ロビーやカフェなど、より大きな空間が必要になる。敷居が高い美術館から、敷居を下げた賑わいのある美術館へ。それをどのように実現するかというのがプロポーザルコンペでの課題だったと思います。

私たちが提案したのは、愛されてきた美術館の姿はそのまま保存した上で、その下にスロープ状の前庭をつくり、入口を地下に滑り込ませるといったものでした。そうすると、神宮道から見た景色はほとんど変わらずに、かつ、賑わいが生まれます。美術館は様々な歴史を経て生きてきたわけですが、それを物理的に残して、かつ新しい層を加えていくにはどうしたらいいかということを考えて設計しました。



京都市美術館再整備後のイメージパース

東側の収蔵庫は、当初は残す計画でした。しかし、その後、地下水位の影響等により新しく造り直さなければならないことになり、この時点で難問を抱えることになりました。後ろ側に新館を造ることになった途端に、新しい層を付け加えるだけでなく、一回壊してまた造るという行為が入ってしまう。この講座でも重要なテーマのひとつになると思いますが、元々あったものをただ残せばいいというのは簡単です。だが、壊して新しくしないといけない場合もある。その場合にどうするのかという問題です。随分悩んだ挙句、京都のまちは、今までの歴史の中で、どのように過去を継承してきたのかを自分なりにもう一回考えてみようと思いました。

非物質的継承（日本の継承の仕方）

平安京ができた当初は、条坊制でつくられた土地割の上に、周りを塀で囲み、その中に寝殿造の屋敷が並んでいたのだらうと思います。しかし、平安末期の年中行事絵巻や中世の洛中洛外図屏風を見ていると、塀だった部分が壊され、そこに町家の原型のようなものが生まれてくる。これはある意味で道と敷地の境界の間に生まれてきた新しい都市空間だったと思います。元々は内側が重要だったものが、外側の方が重要になってくる。ヨーロッパの都市と異なり、日本の場合は骨格だと思っていたところも壊れていき、それがひっくり返って、今まで内側だったもの、あるいは後でついたものが骨格となっていく。このような変化には、換骨奪胎という言葉が思い浮かびます。あるいはまた、日本の連歌には「付合」という技法があります。これは、前の句から

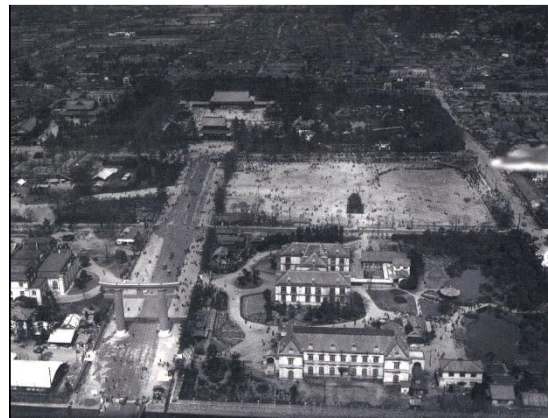
次の句は当然引き継いで繋がらなくてはならないし、繋がることで一体感を持たねばならないが、同時に完全に一体化してはつまらないので、前の句の意味を前の人が詠った時とは違う意味で解釈しなおして次につなげていくというものです。こうしたことが日本の継承の仕方かなと感じます。岡崎地区も、昔から同じ風景だったわけではなく、疎水がひかれたり、博覧会が開かれたり、平安神宮がつくられたりと、その時代の使われ方、あるいはまちの求めていることに合わせて、やはりその時代その時代によって変わりながら、つくられてきたといえます。

こう考えていくと、景観というものはハード、物理的なものだけでできていない。おそらく、美しく使われている物が「美しい」のであって、使われていなくて物として美しいだけでは「美しい」といえないのではないのでしょうか。すべて普通りでやればよいのではなく、その時その時の使い方とセットになって物事が考えられていること、その中に美しさというものが生まれてくるのだらうと思います。

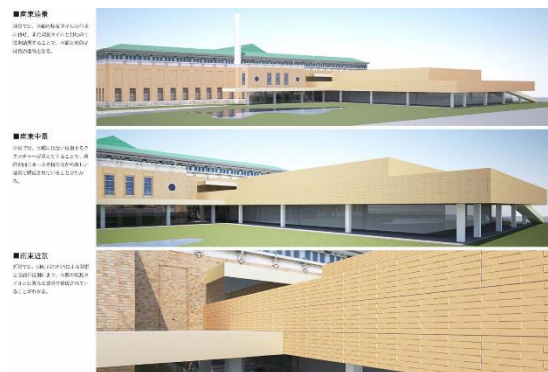
そんなことを考えて、新館の部分をデザインしています。本館とは別のものを作っているのですが、本館と全く同じデザインはできない。しかし、まったく違うもので対比させるというのも、こういう場所ではおかしいだろう。だから、遠くから見れば連続しているように見えるかもしれないけど、近づいて来ると本館と違うものとして見えてくるというように、距離によって見え方、独立性が変わっていくようなことができたらいいなと思いながら検討を進めています。

当初、京都市美術館は物理的な継承とい

うレベルでやっていけるプロジェクトかなと思っていましたが、収蔵庫を造り変えるということがあったために、それだけでは済まなくなった。そのために、非物質的な意味での継承というのをしなくてははいけない。それはある意味で非常に日本的なものであって、例えば水の渦に似ていると思います。渦というのは、水自体はどんどん動いていて、ずっと見ているのは同じ水でないけれど、そこに渦としてあり続けている。それが日本的な継承の仕方だろう。元々のものを読み替えて、違う読み方をするとところに新しい創造性が含まれるのだらうし、それは連歌のようなところで日本人が持ってきた感覚に近いのではないだろうかと考えています。



美術館建設前の商品陳列所と第一歓業館



距離による見え方シミュレーション（新館の外壁）

トークセッション

コーディネーター：中嶋節子

京都の景観をどう見るか

中嶋：今回は「景観を紡ぎ出すデザイン」というテーマで、土木、建築という、直接的、物理的に景観に働きかける立場の先生方に問いを投げかけて、お答えいただく趣旨になっています。まずは、先生方がどのように京都の景観を見ているかについて伺いしたいと思います。

中村：京都は山紫水明の都である一方、明治以降新しいタイプの建築や琵琶湖疏水のような大規模なインフラをいち早く造ってきました。新しいものを取り入れる考え方や伝統的なある種の環境を同時につくってきたことが、非常に面白い。一方、今日は非常に激しい時代で、新しいものをつくりながら、なおかつ古い形と共存させていくことが難しい。青木先生の、モノにこだわるよりもモノの解釈の斬新さが大事なのだというお話は大変重要です。日本の風土的精神で、昔から「みたて」という方法があり、意味を解釈によりずらすことで新しい景観をつくっていく。祇園の白川や鴨川の納涼床も現在の形はそんなに古いものではなく、古いものを新しいものに読み替えて近代化していったところが面白い。

青木：色々な個性のある場所が集まってできていることが京都のまちの大きな特徴ではないでしょうか。しかし、現在はそうした場所の特性は失われてきていると思います。10年前の新景観政策で地域毎の景観のルールを出されたと聞き、すごくいいことをされたのではないかなと思います。正直、少し遅かったのかなという感じがしないではないですが。まちを歩いている、高

さはやはり重要だと思います。高さのルールも随分変えられたと聞いているのですが、やはり町家が続いているところに突然高いものが建ってしまうだけで、相当景色が壊れてしまいます。一方で、京都の条例は、庇をつけたり、色はマンセル値で指定をしたりと厳しい。そうすることで確かに日本的な感じのものはつくれますが、それは決して本物の日本ではないだろうと思います。実際に日本的な生活をしているから日本的な空間があり得るわけで、その空間と違う生活をしているのに、無理やり建物だけは日本風であるというフェイクに近くなってくる、一見日本的に見えるけど実はどうなのだろうということも同時に感じたりしています。

中村：今、中心部の一番大事な田の字型になっている姉三六角の辺りがどんどん壊れています。新しいものが建つ時、セットバックをあまり安易にすると、京都の街並みが持っていた、道との取り合いになっている微妙な部分、半分公的で半分私的な性格の「ノキバ」というところが変わってしまう。これは非常に危ないと思います。また、日本の都市は郊外に割と風雅なところが多かったのですが、東京ではほとんどなくなってしまいました。京都の周辺部の山や麓の辺りは相当よく守られているので、今後ともぜひ守っていただきたい。

景観をつくるルールを考えるには

中嶋：そのまちの景観の規範を決定するルールのようなものを京都で考えることは可能でしょうか。

青木：かつては広場的であった道がどんど

ん交通のための道と敷地の中の建物とに分かれていったので、表面的には町家的な雰囲気が残せても、まちそのものはすごく変わっていると思います。建物がまちとどう関われるか、具体的には道路との関係だと思いますが、そうしたことを、建物をつくらうとする人と一緒に話していかないと変わらないのではないのでしょうか。ハードだけでは済まないと感じます。

中村：中心部を見ていて非常な危機感を覚えるのは、新しい建築が建った時に、前に住んでいた人はどこかに行ってしまうので、住民の組織自身が流動化しているのではないかということ。ハードだけではいけないというのは同じ意見で、先ほど風土の話をしました。市民が育ててきたある種の言語や記号みたいな「風物」を守ること、そういうモノに対する感受性を守っていくということが大事で、結局、話が市民のところに戻ってきます。確かに壊れてはいるが、町並みを見ていると、門前の花一つとっても京都は違うなと感じる。京都にはそういう精神が残っており、市民性を感じます。西洋の市民自治は政治的な色彩が強いが、日本の自治は風土的なある種の主体性や文化的な一体感ではないかと思っています。そうした風土的な自治を京都でぜひやってもらいたい。やっていくとなると市民自身に本気になってもらう以外方法はありません。

市民のまちづくりの機会

中嶋：青木先生は十日町ブシツのデザインを通して地域の方々とコミュニティの再生をされてきましたが、市民が自主的にまちづくりや建築について考える機会について御紹介いただきたいと思います。

青木：十日町では中心市街地の活性化事業をしています。昔の会所のような皆が集まれる、だれがいつ来てもかまわない場所を作るところから始めましたが、そういう場所は管理人が必要なもので、うちの事務所のスタッフがそこに常駐して設計をやっていました。それが表向きの機能ですが、誰がいつ来ても構わない場所としたところ、そこに関わる人がどんどん増える場に段々育ってきました。その育った内容がそのまま、新しくできる建物に入るという設計プロセスを踏んだのです。実際に何かができる動くためには活動する人がいないと始まりません。先に空間があるのではなく、活動からスタートする、それを育てていくところから始めないと、上手くいかないということかなと思います。京都の景観で感じることは、上から来るルールは結構見えるが、地域・地域でルールがつけられるような方向になっていくといいなと思います。

中村：東京近郊で公園を造った時、議論だけでは上手くいかなくて、共通の風景の中で、草刈り一つでもいいので何らかの協働で作業をすることが、市民のコミュニティを新しく作るうえで大きな役割を持つという経験をしました。その時、市民が持っているレベルの高さを非常に感じました。今まではそれを発揮するような条件と場所を我々が積極的につくってこなかったのかもしれない。そういう意味で、六角堂のような、芸能のセンターでもあり、周りには盛り場があり、非常に楽しい場所、市民が喜んで集まってくるシビックセンターを造っていただきたいと思います。

中嶋：青木先生も、京都市美術館においては、賑わいや人が集うということ意識さ

れたと思いますが、どういうアクティビティを想定されて、それがどういう景観になるとお考えでしょうか。

青木：やはり人がいつでもそこを歩いているという情景を生み出したい。だから、建物の計画によって四周の道が、今より人が歩いてくれる場所になるかどうか重要だと思います。美術館の敷地に人が入って来れるように滲み出る、滲み入ってくるものをどうつくれるかということを考えています。私たちが提案したスロープ広場は、建物へのエントランスへ向かう機能と、通過して向う側へ行く道路としての機能があり、演劇等ができるようにも考えていますが、自然発生的に何か生まれる可能性があるのはやはり道だと思っています。つまりそこは歩いていく理由があるようにつくってあり、でも自由に何かが始められる場所としてもつくろうとしています。そういう意味で、周りにある道、その次に中を通る道を良くしていこうと考えています。

今後の京都の景観への期待

中村：道は本来広場性を持っており、河原も重要な広場で、様々な芸能が行われた。そうした賑わいのある広場をどうやって作るかが大事だと思います。

青木：いまロンドンの仕事をしているのですが、ロンドンの確認申請は日本のものと全く違い、申請の前に、委員会でデザインコンセプトの良し悪しについてディスカッションを何回も繰り返します。そうして決まったコンセプトとは異なる案を持っていくと、確認申請は受け取れないと言われました。ものを決めていく過程の中では、ルールより協議をする場がすごく重要で、計画されたものを審議するのではなく、計画を練っていくというところから議論に入れる場ができるということが、大きいのではないかと思います。



会場の意見・感想（アンケート）

- 京都市も狭義の景観政策にとどまらず、まさに、風土の再生戦略に尽力していただきたい。（30代，男性）
- ものにこだわるよりもものの解釈（見立て）が大事。景観を紡ぎ出すデザインは、その中での活動や生活を具現化したもの。（60代，女性）
- 中村先生の市民に本気を出させなければならぬという言葉がとても印象に残りました。（20代，男性）
- ハードだけでなく、使う人が大事。自分のできるところでがんばらなくてはと思った。（60代，男性）
- 京都の取組みは良いが、始動が遅すぎたとの青木氏の意見には同意！！（50代，男性）

4) 第4回：景観・文化の継承と創造

平成29年11月2日(木) 19:00~21:00

キャンパスプラザ京都4階第3講義室

参加者：約100名

講演



佐々木 雅幸

文化庁地域文化創生本部主任研究官

同志社大学経済学部特別客員教授, 大阪市立大学名誉教授

京都大学博士(経済学)。金沢大学経済学部教授, 立命館大学政策科学部教授, 大阪市立大学大学院創造都市研究科教授などを経て, 平成26年4月から29年3月までは文化庁文化芸術創造都市振興室長を務める。

創造都市ネットワーク日本の顧問として, 国内の様々な創造都市の取組を支援。主な著書に「創造都市の経済学」, 「創造都市への挑戦」など。



濱崎 加奈子

有斐斎弘道館代表理事兼館長, 専修大学文学部准教授

京都大学文学部卒業後, 東京大学大学院博士課程修了。学術博士。伝統文化プロデューサー連を主宰。江戸時代の学問所址の建物を現代の学問所として再生させ, 公益財団法人有斐斎弘道館を設立。

茶道, 華道, 香道のほか, 能楽や和歌, 今様, 歌舞伎, 日本舞踊, 京菓子等の様々な伝統文化や伝統産業の魅力を発信。北野天満宮和歌撰者, 京都観光おもてなし大使など, 多方面で活動。

コーディネーター



阿部 大輔

龍谷大学政策学部准教授

講演 1

佐々木雅幸

創造都市とは、市民一人一人が創造的に働き、暮らし、活動する都市のことです。本日は、イタリアのボローニャと金沢を紹介しながら京都のこれからを考えてみます。

ボローニャ（イタリア）

ボローニャは、大学を中心としたまちづくりを古くからやっています。1088年にできた欧州最古の大学であるボローニャ大学からは、様々な分野において創造的なアイデアが世に出されています。世界中から学生が集まったため、歩道空間にポルティコを迫り出し、その上に学生下宿がつくられ、これがまちの景観のシンボルとなり、このポルティコの町並みを残すため、都市景観保全が世界に先駆けて始まりました。独自の景観保存は、生活者である住民を主体としたものであり、全ての住民が参加す

る地区住民評議会という場でどうすれば町並みを残せるかについて議論がなされ、1985年に6段階にわたる詳細な都市計画が決定されました。

また、ボローニャは多品種少量あるいは注文生産に近い手仕事のなものづくりでは世界ナンバーワンです。ヴァイオリン工房などの職人が優先的に住める職人企業地区の指定があり、ものづくりの場所が中心部の歴史的市街地に残されています。一方で、郊外ではフェラーリなどイタリアを代表する高級車もつくられています。これらに共通するのは、付加価値が高い産業という点であり、職人的なものづくりが、伝統工芸からハイテクの分野、先端的なデザインの分野でも連続して行われています。

金沢の取組

金沢でも、創造都市的なまちづくりについて議論や社会実験を積み重ねましたが、キーになったのは都市景観です。伝統的な町の中心に21世紀美術館をつくったり、金沢駅をガラスドームにして「鼓門」をつくったり、伝統文化・芸能を保存するとともに、最先端の現代美術も取り入れています。

もともと金沢は、伝統文化や都市景観の保全に努めてきた経緯があり、条例により保存するエリアと新しい都市景観をつくるエリアを決めていました。生業という無形のものもセットとなった「文化的景観」が世界的に注目されるようになり、景観保全に新しい意味が加わったと考えています。つまり、ボローニャのように景観を守ること、手仕事が残る、工房が町の中にある、



ボローニャのポルティコ



ボローニャの都市計画図



上段：金沢21世紀美術館、金沢駅鼓門、鈴木大拙館
下段：金沢の伝統工芸品

工芸的生産を残していくということです。金沢では、経済界と前市長のリーダーシップで、文化によるまちづくりを推進しています。例えば、紡績工場跡地を「金沢市民芸術村」に再生し、職人や市民がアートを楽しめる空間、創造の場になっています。近代の大量生産では機械の性能が製品の量や質を決めますが、職人的生産は職人の感性や生活環境が製品の出来を決めます。これからは、文化資本を活かし、手仕事の職人的生産を現代的に復興することが創造都市のテーマとなるのではないのでしょうか。

レジリエント創造都市 京都

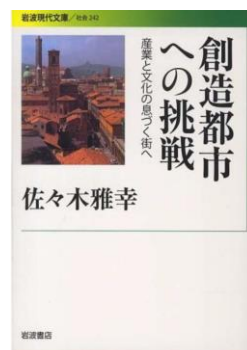
京都は歴史的に「レジリエント創造都市」であったといえます。レジリエントとは、大きなショックを受け止めて再生する力です。応仁の乱で荒れた時、祇園祭の再生により町の秩序を回復しました。東京遷都により衰退した際は、市民独自の産業革命を起こしました。さらに、第二次大戦後のベンチャービジネスは京都の大学をベースに展開してきたのです。歴史の大きな転換期には、文化が京都の社会の基礎にありました。それは、景観を通じて人々の意識の中に美意識・感性を育ててきました。現在でも町家に若い芸術家が住み面白いことを始めたり、職人が自力でものづくりを再生しようとする動きがあります。また番組小学校

を芸術センターや市民のセンターに転換することは、創造的なアイデアが生まれる場として評価できます。

私はこれからの社会、新しい経済は質の良い文化資本によって支えられると考えています。文化資本、文化景観が新しい産業やアイデアを持ってくるので、ここをしっかりと育てることが創造都市の政策になるでしょう。文化庁の移転を機に幅広い文化政策に転換し、これからの文化首都にふさわしい文化と景観はどうあるべきか、これが改めて議論されるテーマなのではないでしょうか。



文化庁の京都移転



佐々木雅幸著『創造都市への挑戦』
岩波現代文庫2012年

景観の背景となる文化・芸術の再興

濱崎加奈子

有斐斎弘道館

有斐斎弘道館は、皆川淇園という江戸時代の儒学者の学問所跡です。私立大学の先駆であり、全国から3,000人の門弟が集ったと言われています。



皆川淇園 肖像

今の建物は、火事による焼失後再建されたので、元の学問所ではありませんが、畳敷きで炭が使えるお茶室があり、路地庭がある数寄屋建築となっています。これほどの数寄屋建築は、現在、どんどん失われており、この建物も9年前にマンションにな



有斐斎弘道館（庭）



有斐斎弘道館（室内）

りかけるといいう危機に瀕し、東奔西走しました。色々な方の手により一時的に保存されているという現状で、数億の借金がある中、返済するため一所懸命、活動しているところです。一度この事態について考えていただきたいと思います。こうした場所が京都であつてもどんどん失われてしまっていますが、文化そのものが無くなってしまふのではないかと危機感を感じています。

弘道館は淇園の学問所だったことに因む文化芸術を通した学びの場ですが、「どんな学びが今の時代必要なのか」、「どんなところが学べていないのか」について語らえる学問所として再生できれば、ここが残された意義は大きいと考えます。

茶道を通して考える

茶道とペットボトルで飲むお茶はどう違うのでしょうか。点前作法はあえて客前でお茶を淹れる作法（動作）が、型を伴う伝統的な文化になっているのだと思いますが、何故、我々の祖先は客前でお茶を淹れるようになったのでしょうか。何故その動作を美しくしようとしてきたのでしょうか。「お茶を沸かす炭は電熱でもいいのではないか」

「高価な和蠟燭でなく、洋蠟燭や電気でもいいのではないか」と言われる方もいます。教室では、これを上手く言葉にできず、いつも困っていますが、その場所に座ってみるとその価値が初めて分かります。実際に座敷で炭の弾く音や匂いを身に受けながらお話をすると、「絶対に失くして欲しくない」とおっしゃいます。やはりそういう場所にいる、景観が維持されている場所にいるということが大切なのです。しかし、

美意識や感性を育ててきた景観や場所があったにも関わらず、何故、今、我々は必要だと完全に思えないのでしょうか。とても重要な問題だと思います。



有斐斎弘道館（茶室）

文化、芸術の再興

私は、550年前に糺の河原で行われていた糺勸進猿楽など、文化、芸術の再興のプロデュースをたくさんさせていただいています。景観は見えるものですが、実はその向こうに、或いは地層に、見えない人々の息吹や息使いなど見えない景観の重なりが絶対にあるはずで、そこで何が行われていたのかを探るための「よすが」が芸能なのかもしれません。

芸術は、「美」がキーワードだと思います。美に向かい何かを創る・観に行く・感じることに役割があり、「美」にこそ知恵があるのではないかと思います。

和漢朗詠

日本には、新しいものと古いもの、日本的なものと最先端のもの、両方があってこそ教養であり、文化がつくられるという思想がありました。現代に必要な「知」、あるいは「美」というものを今の人たちに知ってもらう場にしようと、北野天満宮で、道真公が出られた曲水にあやかって曲水の宴を再興しますが、そこでは日本的な和歌と当時は最先端であった漢詩を同時に詠みま

す。大事なことは、和漢、新しいものと古いものどちらもあって、今の伝統がつけられているのだという学びになることです。

我々日本人の美意識や知恵を培ってきた基となっているのは、お茶や和歌、お能に代表されます。美がすなわち知恵で、目に見えないものも含めて美として感じ取れる。文化芸術はそういったものを作ってきたのではないかということをもとに活動をさせていただいています。



北野天満宮 曲水の再興



小倉百人一首 京菓子展
(2017年10月21日～11月5日／有斐斎弘道館)
※内容はトークセッションで紹介。

トークセッション

コーディネーター：阿部大輔

これからの産業・働き方

阿部：もはや製造業が都市を支えて行けるという状態ではない現代、次にどのような産業が地域を支えていくのか、世界中で模索が続けられています。大きな可能性を秘めているのが創造産業ということですが、もう少し詳しくお伺いしたい。

佐々木：今、日本を代表する大企業は軒並み大企業病に悩んでいます。コストダウンのため基幹的作業員を外注し検査のプロがいなくなり、本来の強度が出ない製品を売ったり、とんでもないことになっています。この現象は実は10年前、20年前にアメリカやヨーロッパでもありました。もはやものづくりの大企業が時代に合わなくなっています。一方で、人生100年を前提に設計する考え方が、政府が進めている働き方改革の基調にあります。企業は終身雇用を提供できないが、寿命は延びていくので、我々は「変身」の必要性に迫られます。つまり、人生の途中で違う仕事に就くことができる能力が求められています。すると、大学が典型ですが、学びの場が一つの創造産業となります。AIが進出すると、人間の能力として創造性を真面目に考えなくてはなりません。芸術系の仕事やマルチメディアを使った領域が増え、観光業も爆買の時代からゆっくり文化を鑑賞する時代となってくる。そして自動車はエンジンが不要になると構造が簡単になり、よりデザインが重視され、自動車会社はデザイナーをより多く雇うかもしれません。世の中は、大量生産や定型的な仕事から創造的な仕事に大きく転換していきます。ラテン語では

職人たちが創造的な仕事をするを「オペラ」と言いますが、そうした働き方で創造性を高めること、その方向に支援することがこれからの産業政策となります。

濱崎：10年ほど前、多くの自動車メーカーの方々が弘道館に茶道を体験しに来られました。茶室という空間は、美と共存しながら、人がある種の合理的な動きをするミニマル空間であり、そこに世界が注目していたのではないのでしょうか。車も小さな空間ですので、何とかお茶の構造を取り入れようと現場は必死だったのです。なかには自費で来られたグループもありました。

文化の継承と景観

阿部：英語の「アート」には美だけでなく作法という意味もあります。不文律で伝わる作法がまちの文化であり、滲み出る景観に響いてたと思います。それがこの数十年どうも自然には継承されなくなり、空間や町並みに大きく影響していると思います。

佐々木：日本は芸術を和と洋に分けてしまいます。芸術という言葉が入ってくる以前は日本には工芸という言葉があり、置物やお茶の道具など全て生活と結びついた「用の美」でした。和と洋を分けることで西洋の仲間入りをし、近代国家をつくった反面、不幸にも和の様式は古くて、洋の様式は新しく合理的だという大きな断絶を作ってしまい、近代的な都市をつくることは和を切り捨てるという方向に傾いてしまいました。和のものを復興しようとする、「伝統工芸を保存しよう」となり伝統に固定されてしまいますが、本来の工芸は生きており、現代工芸にあるように、古いものを保存した上で新しいアイデアを

繋いでいく考え方が明治以降の輸入学問にはなく、この流れが都市計画や景観にも出てしまったのではないのでしょうか。

濱崎：先ほど「和漢朗詠」の話をしました。茶の湯の世界で「和漢の境を紛らかす」という有名な言葉があります。和と漢の境目を分からないようにし、その上で次の時代に新しいものを入れていくという発想です。それこそが知恵なのですが、何故それを忘れてしまったのでしょうか。

文化的空間、創造の場

阿部：京都は保守的に見えて新しい試みに寛容で、それが伝統産業のイノベーションにつながっていますが、景観や文化にはうまく接続できていません。景観は壊したら元に戻らず不可逆である一方、文化はゆらゆらと遷移していきます。実はそこに差があり、文化はつながっても景観上反映されない、空間上の在り方が連動しなくなっていると思います。

濱崎：茶道は人間の身体を用いるので、次の世代、次の世代へつないでいくことができ、茶室がなくなっても点前作法という意味ではなくなりません。炭が使えないとか床の間がないとか庭がないとか、一つ一つを取り出すと、それらがなくても茶道はできます。では茶室はなくてもいいかという話になるが、そうではない、それこそ人間が身体で伝えている価値と、空間が伝えている価値があると思います。

佐々木：お茶の空間は面白く、お菓子も含めて全てに意味があり、その意味を亭主と正客が読み解いていく高度な楽しみ方があります。それはまさに文化的空間といえ、その空間の持っている価値が分かるにはルールを知っている必要があります。文化的

価値を含んだ経済を創造経済といい、文化的な価値が分かる消費者が多いまちには豊かな文化を創造する場が生まれます。かつての創造の場は、欧州ではコーヒーハウス、カフェであり、日本では茶室です。そこはお茶を飲むだけではなく、新しい考え方をやりとりし、様々なアイデアが生まれる場であり、そういった創造的な空間を今再興しようとしてきているのでしょうか。

濱崎：そうですね、さらにお茶をすることによって、創造性を学ぶことが出来る、学びのツールと考えても非常によくできています。

「型」の継承と「型破り」

阿部：文化に作法や型を学べる装置としての側面があるとする、「型破り」という言葉がありますが、それは型を身につけて初めてできるものかと思います。型破りこそが創造ではないのでしょうか。そして型を学ぶ手段や場が少なくなっており、型をどう再生していくかが、継承問題ではないのでしょうか。型を大げさに破るのではなく、伝統を踏まえながら、少しずつずらしながら破ることが文化の進展だと思いますが、関連した活動を御紹介いただければ。

濱崎：職人ではなく一般の方の公募による京菓子展を開催しています。着物でも何でもそうですが、菓子にも本来はこの人にこんなものを食べてもらいたいというものを経営的にオーダーするという文化がありました。今回の試みは、一般の方が小倉百人一首から自身で選んだ和歌を読み解いて、それをテーマにした美を作ること、デザイン画でいいので実際に形をつくることにあります。次の段階で、職人が形にしますが、最近はおオーダーを受ける機会が少ないため、職人も「こんなものできない」と困り、そ

ここでせめぎ合いが生まれ、新しい技術が生まれます。リアルを追求する時代に、抽象的ではなくなり、ぱっと見たら何かわからないが、「小倉山」や「からくれない」といった名（めい）がついており、想像しながら、語らいながら、しかも新しいという感覚にさせる。そういう体験をすると、創造のネタは古典にたくさんあるということに気が付きます。ただ、本来的にはオーダーする側も技術や京菓子の歴史を知った上で、少し職人に無茶を言うことで、お互いに育っていけばいいと思います。

佐々木：職人が「こんなのどうするんだ」となる、それがいい。本当に先を読んでいく主人は職人を遊ばせます。職人がちゃん

と遊んでいないと型破りはできません。クリエイティビティは思いがけない出会い（セレンディピティ）から生まれます。J・ジェイコブスは、社会の発展はイノベーション（技術革新）だけではなく、インプロビゼーション（即興演奏）が大事だと言っています。企業の中でインプロビゼーションが起きなければならない。アメリカでは、ゲイ、レズビアンが多いまちはクリエイティビティが高いと言われています。つまり多様性、多様な人が存在しているところが創造都市であり、京都は沢山の学生や世界中の学者が出入りし、そうした人達が持ってくる刺激をまちの人達もずっと体感している、まさに創造都市なのです。



会場の意見・感想（アンケート）

- みえない部分（文化、芸能、歴史）から見る景観もあるということを学ぶことができた。（20代，女性）
- 文化を実感できる空間・景観の大切さが実感できた。それが楽しめる京都に住んでいることの幸せを改めて感じた。（60代，男性）
- 古代から根づいた伝統芸能を通じて文化の進展を通して美や感性をみがいたり受け入れたり、日常的に気づくことが求められることを学んだ。（60代，男性）
- 古いものとの連続性の上に新しい創造性をつくること、こうしたことが非常に大きなテーマと感じた。（40代，男性）